根 来 寺 坊 院 跡

一岩出町立歴史民俗資料館建設に伴なう発掘調査一

1988年3月

(財)和歌山県文化財センター

根 来 寺 坊 院 跡

――岩出町立歴史民俗資料館建設に伴なう発掘調査 ――

1988年3月

(財)和歌山県文化財センター

和歌山県那賀郡岩出町に所在する根来寺は、保延6年(1140) 興教大師 覚鑁による開山以来、高野山金剛峯寺と二分するほどの勢力を擁し、最盛 期には院坊堂舎の数が二千数百ともいわれ、中世には全国でも有数の規模 をもった寺院であります。しかしながら、天正13年(1585) 豊臣秀吉の根 来攻めにより、大伝法堂や大塔などを残して全山ことごとく灰燼に帰しま した。以上のような根来寺の隆盛と滅亡の歴史を示す遺構や遺物が現在も 水田の下でひっそりと眠っています。

根来山内では、昭和51年山内を東西に貫通する紀の川地区広域営農団地 農道整備事業道路工事が行われることになり、事前の発掘調査が実施され、 その重要性をかんがみて昭和55年度からは県教育委員会により10ヶ年計画 の下で発掘調査が開始され、現在その8年度目の調査が終了しております。 また、その成果も順次発表されております。

今回の発掘調査は、根来山内に計画された岩出町立歴史民俗資料館建設に伴って実施したもので、鎌倉時代から江戸時代に至る井戸や池跡など多数の遺構が検出され、また、鉄製の釜や五徳など貴重な遺物も多数出土しました。ここに、その発掘調査結果をとりまとめ、報告書として刊行いたします。本書が県民の皆様のみならず、学界にも貢献することができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、本調査の実施にあたり御指導、御支援を賜った和 歌山県教育委員会、岩出町教育委員会、根来寺の方々に対し、改めて厚く 御礼申し上げます。

昭和63年3月

財団法人和歌山県文化財センター

理事長 仮谷志良

例 言

- 1 本書は岩出町立歴史民俗資料館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査に係る経費については岩出町が負担した。
- 3 発掘調査は、岩出町から委託を受け、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
- 4 調査にあたっては、和歌山県教育委員会の指導を受け、調査委員、牛川 喜幸、岡田 英男、羯磨 正信、巽 三郎、都出 比呂志、藤澤 一夫、各氏(和歌山県文化財保護審議委員)の指導助言を得た。
- 5 調査組識については下記のとおりである。

和歌山県教育委員会			財団法人和歌山県文化則	オセンタ	y —
文化財課長	梅村	善行	事務局長	梅村	善行
文化財課主幹	福田	資弘	次長	菅原	正明
文化技術班長	高橋	彬	埋蔵文化財課長	辻林	浩
文化技術班專門員	吉田	宣夫	埋蔵文化財課技師	村田	弘
同 専門員	藤井	保夫	同 技師	黒石	哲夫
			管理課長	松田	正昭

- 6 調査、並びに本書の作成にあたっては、調査補助員 窪田 雅秀の助力を得た。
- 7 調査は、村田、黒石が担当した。また、本書の執筆については主に黒石があたり、**№**章(遺物) を上田 秀夫が、付論を菅原が担当した。
- 8 本書の遺構写真は黒石、窪田が、遺物写真は上田が撮影した。また、遺物の実測には村田、黒石、 窪田、河内 暁美、上野 道代、作田 淳子があたり、遺構・遺物のトレースには中井戸 智子、 三木 匡子、黒石、窪田があたった。
- 9 本書の編集については、埋蔵文化財センター次長菅原、埋蔵文化財課長辻林の指導助言のもとに、 黒石が行った。
- 10 本書の遺物実測図と遺物図版に付した番号は一致する。遺物は原則として光で、大型品については光で収録した。光のものについては個々にスケールを付した。
- 11 本書で使用した遺構記号は下記のとおりである。

SG 池 SE 井戸 SX その他

SF 溜桝 SK 土坑

SA 塀 SD 溝

12 調査にあたっては、岩出町、根来寺、地元の方々の深い御理解と御協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

目 次

第Ⅰ章	章 位置と環境		
第]	節 遺跡の地理的環境と概要		1
第2	2 節 遺跡の歴史的環境		1
第Ⅱ章	章 調査に至る経緯と経過		9
第Ⅲ章			
第]			9
第2			10
第3	3節 個別遺構		10
第N章	道 物		
	· · ·		17
			19
N1 D	7 NO 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10	•	-
第V豸	きょとめ きょとめ		24
.,,	·		
付	論 根来寺坊院跡出土の釤	特釜と五徳	26
	図	目	次
第1図	遺跡の位置と範囲	図 2	表土の遺物
第2図	山内地形図・調査区位置図	図3	表土・第1層の遺物
第3図	上面遺構平面図	図 4	
第4図			第2層・3層・4層の遺物
第5図	下面遺構平面図	図 5	第2層・3層・4層の遺物 第4層・5層の遺物
	下面遺構平面図 調査区基本層序模式図		
第6図		図 5	第4層・5層の遺物
第 6 図	調査区基本層序模式図	図 5 図 6	第4層・5層の遺物 SG01・02の遺物
	調査区基本層序模式図 S G 0 1 実測図	⊠ 5 ⊠ 6 ⊠ 7	第 4 層・ 5 層の遺物 S G O 1 ・ O 2 の遺物 S G O 2 の遺物
第7図	調査区基本層序模式図 SG01実測図 SG02実測図	図 5 図 6 図 7 図 8	第 4 層・5 層の遺物 S G O 1・ O 2 の遺物 S G O 2 の遺物 S G O 3・ O 4・ S F O 1 の遺物
第7図第8図	調査区基本層序模式図 SG01実測図 SG02実測図 SG04実測図	図 5 図 6 図 7 図 8 図 9	第 4 層・5 層の遺物 S G O 1・ O 2 の遺物 S G O 2 の遺物 S G O 3・ O 4・ S F O 1 の遺物 S K O 2~ 2 1 の遺物
第7図 第8図 第9図	調査区基本層序模式図 SG01実測図 SG02実測図 SG04実測図 SF01実測図	図 5 図 6 図 7 図 8 図 9	第4層・5層の遺物 SG01・02の遺物 SG02の遺物 SG03・04・SF01の遺物 SK02~21の遺物 SK22~27・SD05~14の遺物
第7図 第8図 第9図 第10図	調査区基本層序模式図 SG01実測図 SG02実測図 SG04実測図 SF01実測図 SX01実測図	図 5 図 6 図 7 図 8 図 9 図10	第4層・5層の遺物 SG01・02の遺物 SG02の遺物 SG03・04・SF01の遺物 SK02~21の遺物 SK22~27・SD05~14の遺物 SA01の遺物
第7図 第8図 第9図 第10図 第11図	調査区基本層序模式図 SG01実測図 SG02実測図 SG04実測図 SF01実測図 SX01実測図 SX03実測図	図 5 図 6 図 7 図 8 図 9 図10 図11	第4層・5層の遺物 SG01・02の遺物 SG02の遺物 SG03・04・SF01の遺物 SK02~21の遺物 SK02~21の遺物 SK22~27・SD05~14の遺物 SA01の遺物

6 SE1001 (北から)

図17 S X 1001の遺物

図版目次

図版 1 1 西調査区上面 (東から) 図版 8 1 S X 1001 (南から) 2 西調査区上面東半部(北から) 2 S X 1001 (西から) 図版 2 1 東西調査区上面全景(東から) 3 SB1001・SA1001・1002・1003(西から) 2 東調査区全景(東から) 4 西調査区南西部土層 5 SK02石仏出土状況 図版3 1 西調査区下面南東部(東から) 2 西調査区下面南東部(西から) 6 SE1001鉄釜出土状況 図版4 1 SG04 (東から) 図版 9 包含層の遺物 2 SE1001 (東から) 図版10 包含層の遺物 図版5 1 SG01 (南から) 図版11 包含層の遺物 2 SG02 (東から) 図版12 包含層の遺物 図版13 包含層の遺物 3 SG02 (北から) 4 SG03 (北から) 図版14 包含層の遺物 5 SG04東岸 (西から) 図版15 上面遺構の遺物 6 SG04北東隅(南から) 図版16 上面遺構の遺物 図版 6 1 SF01 (北から) 図版17 上面遺構の遺物 2 SF01 (西から) 図版18 上面遺構の遺物 3 SF01 (西から) 図版19 下面遺構の遺物 4 SX01 (西から) 図版20 下面遺構の遺物 5 SX01 (西から) 図版21 下面遺構の遺物 6 S X O 1 駒 (西から) 図版22 下面遺構の遺物 図版7 1 SX03 (東から) 図版23 下面遺構の遺物 2 SX04 (西から) 図版24 下面遺構の遺物 3 SA01 (北から) 4 SD01 (東から) 5 SE1001 (東から)

第1章 位置と環境

第1節 遺跡の地理的環境と概要

根来寺は、和歌山県那賀郡岩出町根来に所在し、紀ノ川北岸の和泉山脈から派生する尾根と、独立山塊状の前山に挟まれた狭小な平地部と谷間に位置する。山内の西側を通る根来街道を北行し、和泉山脈の風吹峠を越えると泉州に入り、かつて和泉地方と高野山を結んだ交通の中継地にあたる。また、南方を旧淡島街道、さらに南の紀ノ川沿いを旧大和街道が走る。現在、根来寺の遺跡の範囲として考えられているのは、町屋部分およびその周辺も含め、東西 3.5km、南北 2.0kmであり、このうち直接の寺域と考えられるのは、東は菩提峠から西は泉州へ抜ける根来街道までの東西約 2.0kmと、北山南斜面の谷奥から前山北斜面までの南北約 2.0kmの範囲である。前面には「前山」、背後には通称「北山」と呼ばれる和泉山脈を控え、天然の要害としての条件を備えた地に立地している。これは戦国期根来寺が宗教活動を行なう寺院であるとともに、僧兵と呼ばれる武装集団を擁した中世城砦的な色彩をも合わせ持った寺院であったことと無関係ではない。

山内の遺構の立地は、三種に大別される。それは、平地部に立地する遺構群、北山深くに延びる緩やかな谷間に立地する遺構群、平地部を望む斜面を造成して立地する遺構群である。現在までのところ、断片的な発掘調査の資料から、断定はできないが、総体として、江戸時代の平地部の坊院の敷地区画は、現状の水田畦畔に残されており、大きくみれば、天正13年(1585)の兵火時の坊院の敷地区画と大差なく、間口30m 程度の規模が坊院の敷地区画の標準になると考えられている。これに対して、北山の各谷間には現在も階段状の地形がよく残っており、この各段を単位とした敷地内には建物が営まれていたようである。これら階段状の敷地は地形に左右されていることもあるが、平地部の坊院に比して敷地面積は小さく、遺構や遺物の上で平地の坊院と異なる点が多く、その性格の違いを示している。

第2節 遺跡の歴史的環境

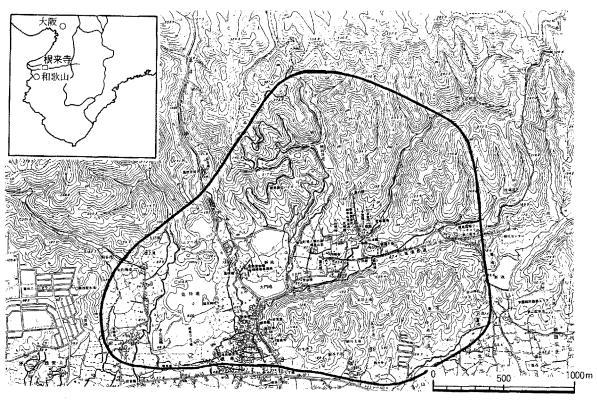
本遺跡の範囲内では、昭和51年度以来、継続して発掘調査が行なわれているが、平安時代中期以前の 遺構および遺物は確認されていない。このことから、根来山一帯の開発は、開祖とされる興教大師覚鑁 が高野山より根来の地に移り、止住した12世紀中葉以降から始まったと考えられる。本項では、根来寺 と総称される山内の寺院群の歴史を中心として概観し、遺跡の歴史的環境としたい。

本遺跡の所在する和泉山脈の南斜面から岩出町、打田町の紀ノ川北岸の河岸段丘にかけての地域は、紀ノ川中流域の中心地として古くから開発され、古墳時代の遺跡は、八幡塚古墳や黒土古墳、三昧塚古墳群等があり、奈良時代の遺跡は、塔の基壇が調査され、白鳳期の軒丸瓦が出土している西国分寺跡や、発掘調査によって寺域の寺割と伽藍配置等が明らかにされた紀伊国分寺跡、官衙跡の可能性が指摘されている岡田遺跡や西国分Ⅱ遺跡等がある。

根来寺の開祖とされる覚鑁が、高野山金剛峯寺方との対立抗争の結果、高野を離山して根来に来山し 止住したのは保延6年(1140)のことである。覚鑁が根来の地を選んだ理由は、地の利とともに、当地 が高野山における大伝法院の寺領の一つである弘田荘の北部にあたり、また、大伝法院の末寺として鳥 羽上皇より寄進された豊福寺が存在していたからではないかと推察される。覚鑁はその後、豊福寺内に 円明寺と神宮寺を建立し、それ以降の根来寺の礎を築いたといわれている。円明寺の創建当時の寺域は 大塔の南西約300mに現存する円明寺とほぼ同位置にあったと推定されており、発掘調査の結果でも、 山内で最も古い時期に属する中国製の白磁や瓦器類は円明寺周辺を中心にみられ、山内の開発が円明寺 周辺から開始されたことを物語っている。しかしながら、根来寺の草創期ともいうべき覚鑁の時代の根 来寺と、豊福寺に関しては、いまだ不明な点が多い。

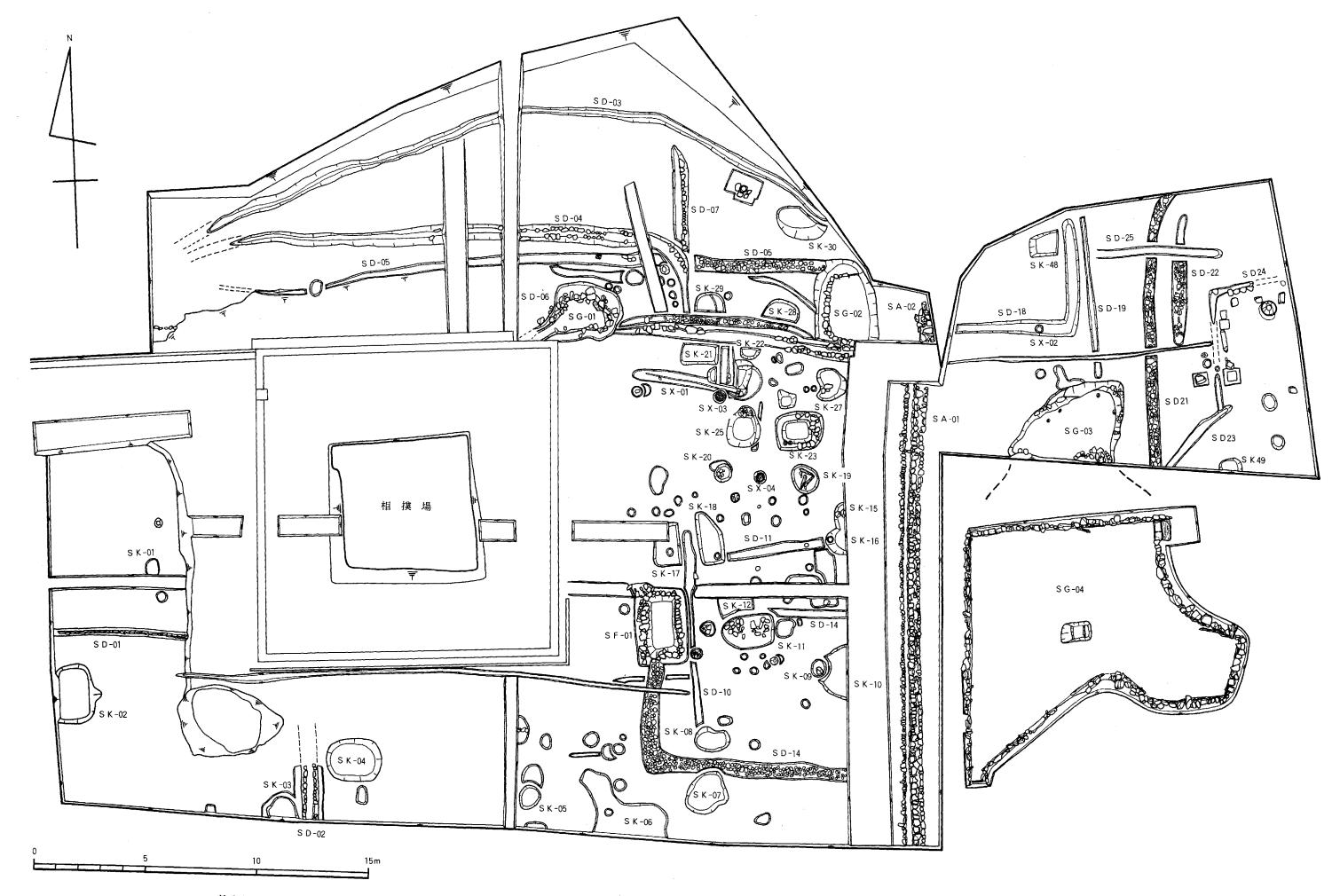
党鑁の没後、12世紀末から13世紀末にかけての時期は、出土する遺物が極めて少なく、空白期の様相を呈している。しかし、正応元年(1288)には、大伝法院第十一世座主頼瑜が、多数の大伝法院方の僧侶と共に、高野の大伝法院の寺籍を根来寺に移し、同時期以降を境として出土遺物も増加の傾向を示す。その後、室町時代から戦国時代にかけては、山内の院坊・堂舎は増加し、平地部のみならず北山の狭い谷間にも多数の建物が建てられていることも発掘調査により明らかにされている。また、前山稜線上で岩盤整形を伴う土塁状の遺構と、掘切と考えられる遺構が検出され、和歌山平野を一望する稜線西端の主尾根頂部でも矢倉と考えられる遺構が検出されていることから、断定はできないが、根来僧兵が活躍した戦国時代には、根来寺は城砦的な性格も有していたと考えられる。

天正13年(1585)は根来寺史研究上重要な年である。この年の3月、豊臣秀吉の和泉・紀伊両国への進攻が開始され、3月23日には兵火により、根来寺山内は炎上し、大伝法堂、大塔、大師堂、山門を残して、ことごとく灰燼に帰してしまった。これが、いわゆる秀吉の根来攻めといわれるもので、山内の発掘調査においてしばしばみられる厚い焼土層がこれにあたり、遭構や遺物の年代を推定する上で重要な基準となっている。天正の兵火時から17世紀後半にかけては出土する遺物が少なく、第2の空白期という状況を呈している。それ以降の時期は、遺物や遺構とも検出例は多く、兵火後の復興も進み、根来、山内に再び多数の坊院が営まれたことが窺える(参考文献 ①~③)。

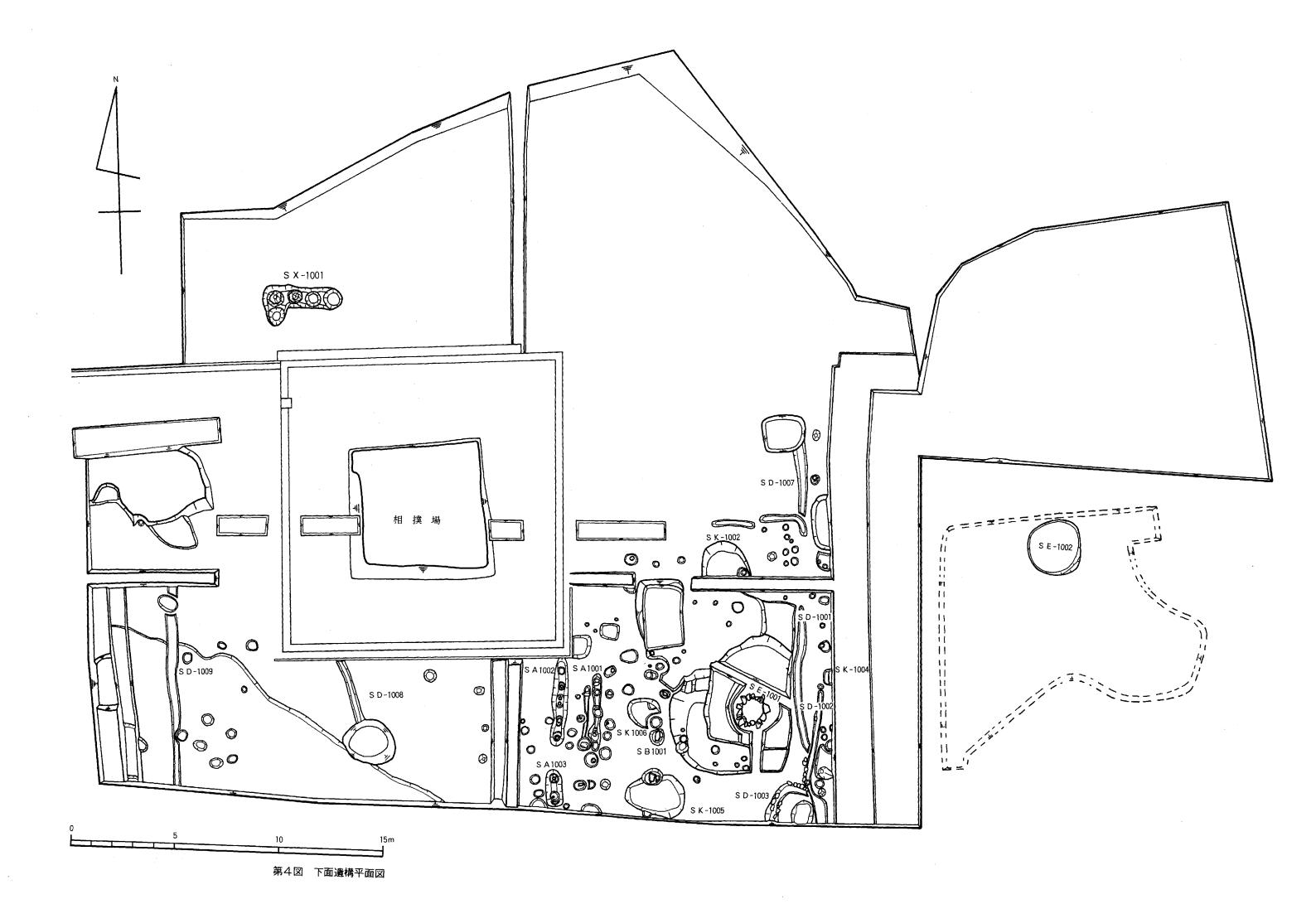


第1図 遺跡の位置と範囲

第2図 山内地形図・調査区位置図



第3図 上面遺構平面図



第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

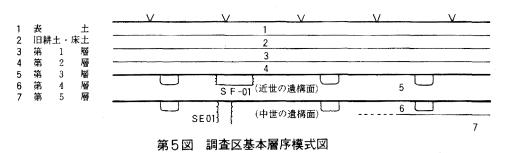
岩出町は、昭和60年頃から歴史民俗資料館建設の構想をもち、建設予定地に根来山内と他の一ヶ所があげられていた。翌昭和61年には建設予定地を根来山内に決定し、和歌山県と建設に伴う協議を開始したが、内容が発掘調査を含め多岐に及んでいたため、協議が成立したのは翌昭和62年である。協議成立と同時に県教育委員会から発掘調査を依頼された財団法人和歌山県文化財センターは、岩出町と委託契約を締結し昭和62年5月25日から発掘調査を開始し、同年9月末日をもって調査を完了した。この後、建築の設計変更が行われたため、明王院跡に残る池に資料館の基礎が及ぶことが判明した。この報を受けた県教育委員会は岩出町と協議を行い、岩出町を事業主体とし調査を実施することとし、財団法人和歌山県文化財センターから職員を派遣し、昭和62年12月15日から調査を開始し、昭和63年1月8日に完了した。

調査区域には、西側に菩提院、東側に明王院という二つの坊院が近世には存在していたことが絵図などから知られ、作業効率の点も考慮して、菩提院跡調査区と明王院跡調査区とに分けて調査を開始した。 表土を機械掘削で除去し、遺物包含層を人力で掘り下げ、遺構検出を行った。8月14日に上面遺構の発掘を終え、遺構を写真撮影した。遺構検出面は江戸時代中期以降の上面と、それ以前の下面とに大別でき、9月16日には下面遺構の発掘を終了し、9月30日にはすべての現場作業を完了した。

第Ⅲ章 遺 構

第1節 層 序

調査地は大塔の南約 200mの盆地の中央部分で、近世の菩提院・明王院跡である。旧地表の標高は北端で約94.5m、南端で約93.2mである。調査区の西半部は菩提院跡で相撲場の建設により削平を受けていた。調査区の北部、山裾では、上層より斜面から崩落した灰黄色砂礫土と暗灰褐色土が斜めに堆積し、その下は岩盤である。遺構は、この岩盤を掘削して築かれている。中央部から南部にかけての平坦部は、寺院廃絶後、水田として利用されており、基本的な層序は上から盛り土、旧水田耕作土、床土、淡黄色小ブロック土混じり淡灰色土(第1層)、砂礫・淡黄色土混じり淡灰色土(第2層)、礫混じり暗茶灰色土(第3層)、淡茶灰色土(第4層)、礫混じり淡黄色土(第5層)、淡灰黄色土の地山の順である。調査区域の東部は明王院跡で、上から礫混じり淡灰色粘質土、灰色粘質土混じり灰黄茶色土の2層が約 0.4m堆積し、その下が淡灰黄色の地山である。第1・2層を除去後近世の遺構を検出し、第3層の除去後に天正の兵火に係る時期の遺構、第4・5層を除去後、兵火以前の遺構を検出した。



第2節 検 出 遺 構

菩提院跡の北側と明王院跡では江戸時代中期以降の遺構が大半を占め、天正の兵火時以前の遺構は 主として菩提院跡の南側を中心に広がっていた。また、相撲場の東西にトレンチを入れた結果、菩提院 跡の中心部は相撲場の造成工事によって遺構は完全に削平されていることを、確認した。

主な遺構は18世紀以降の池跡(SG01・02・03・04)、溜桝跡(SF01)、竹製導水管を埋設した遺構(SX01・02)、桶を埋置した遺構(SX03・04)、素掘りの溝(SD03・11・18)、素掘りの溝に挙大の和泉砂岩を充填した暗渠(SD05・14)、 両側に和泉砂岩を並べた石組みの溝(SD02・04)、丸瓦を組合わせた溝(SD01)、土坑(SK02・11・21・24・25・48・49)、柱穴、土塀の基底部石積み(SA01・02)、16世紀の石積み井戸(SE1001)、15世紀の井戸(SE1002)、埋甕遺構(SK1001)、13世紀から14世紀にかけての門跡(SB1001)、塀跡(SA1001・1002・1003)である。

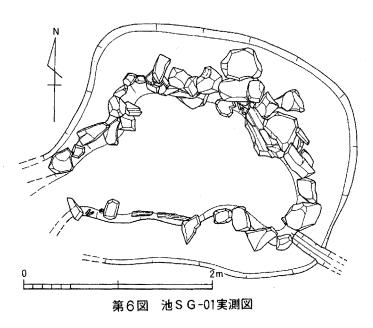
このように本調査区の遺構は、江戸時代後期以降、天正の兵火(1585)にかかる時期、天正の兵火以前の三時期に大別できる。しかしながら、各時期における坊院の建物の配置や園池の構造などは断片的な資料のため解らなかった。

第3節 個 別 遺 構

A上面遺構

池(SG-01)(第6図)

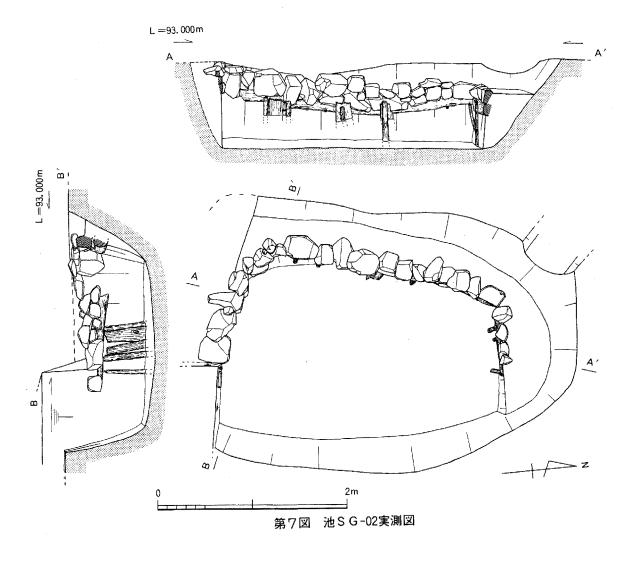
池(SG01)は菩提院跡調査区の北部中央で検出した池跡で、南西部を相撲場のコンクリート製排水溝で破壊されており、正確な形状および規模を復原することは難しいが、現存する限りでは、東西約3.3m、南北約2.5mの不整な長楕円の形である。深さは約0.5m程で比較的浅い池である。掘形は堅い岩盤まで掘り込んでおり、護岸として20cmから50cm程の和泉砂岩を2段乃至は3段にやや乱雑に積んでいる。また池跡の北東隅基底部には、縦約70cm・横約50cmの紀ノ川流域で産出される結晶片岩の青石



が腰石として据えられていた。池跡の 南岸では加工した板材を胴木として水 平に横に渡し、杭で固定して崩れない ように補強がなされていた。SG01 の導水施設として溝(SD08)がそ の役割を果していたと思われる。埋土 は2層に分層でき、上層が灰茶褐色泥 土で、下層が暗灰褐色泥土であった。 下層が暗灰褐色泥土であった。 下層が出土した。池の立地を考えると、 青石が南西に面を向けて置かれ、池の 構造も北東側が高く、南西側が低く造 られており、建物の北東に配されて、 背後の山を借景としていたようである。

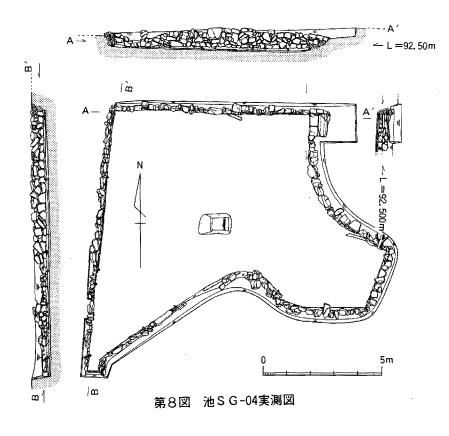
池 (SG-02)(第7図)

SG02は菩提院跡の北東隅で検出された池跡である。規模は南北が約 3.5m、東西が約 2.5mで、南北と東に長い台形の形をしている。深さは約 0.7mから 0.9mと、小形の池としてはやや深めの池である。池は西半部は、石組みが残存していたが、東側は遺存状況が悪く、石組みや胴木は破壊されていた。西岸は、最も残りが良好で、大きさ20cmから40cm程度の和泉砂岩が1段または2段に内側に面を揃えて積まれていた。その下には、直径12.3cm程の頑丈な丸太を胴木として約2.5mの長さにわたって横にはわし、先端を加工した杭を4本垂直に打ち込み、当て板をかませて固定していた。北岸も同様に、20cm程の和泉砂岩の石積みが1段だけ残っており、その下は、直径10数cmの頑丈な丸太の胴木が横に渡され、三ヶ所を杭で固定していた。南岸も同様に人頭大の和泉砂岩の石積みが1段から2段残り、その下は直径10cm程の丸太の胴木で補強されており、杭が2本打たれていた。下部は粘土質の地山を堀り込み、保水性はかなり良好であったと思われる。北西隅に西に延びる溝(SD05)が取り付けられており、SG02の取水溝であると考えられる。埋土は上層と下層の2層に大別でき、上層は上から①小礫混じり淡灰色弱砂質土、②小礫混じり黄灰色弱砂質土、③茶灰色弱砂質土、下層は、④淡灰色粘質土、⑤淡青灰色弱粘質土、⑥細砂混じり灰色粘質土であった。上層と下層からは伊万里焼の碗が多量に出土しており、碗の形態からは大きな時期差は認められない。また、下層からは墨書された木札と、柄杓が出土している。



池 (SG-04) (第8図)

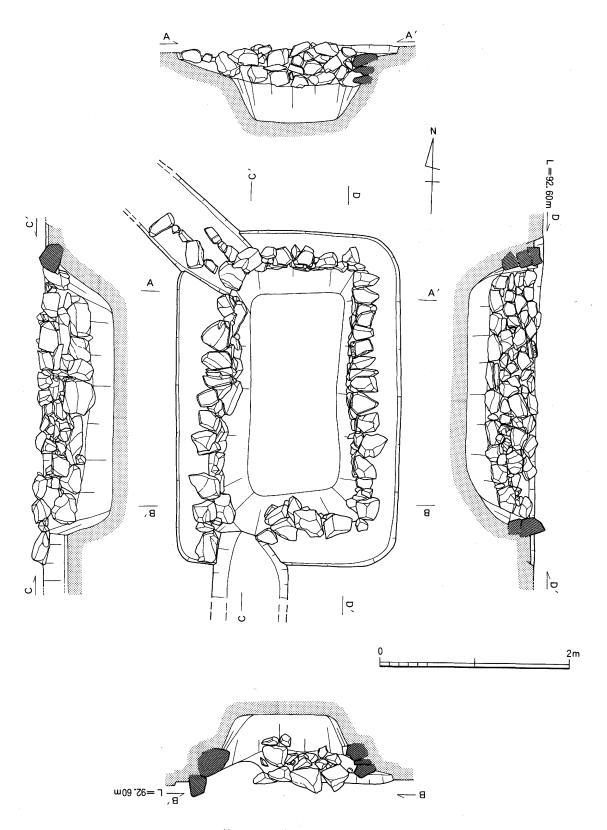
池(SG04)は明王院跡の南側に現存する池で現在も初夏には、菖蒲や睡蓮が美しい花々を咲かせている。植物を移植して、発掘調査した結果、北辺と西辺がほぼ直線上に造られて、直角よりやや広めに交わり、東辺と南辺は屈曲して造られた台形状の石組みの池であることが判明した。池の規模は南北約12.1m、東西約12.8mで深さは約0.6mから0.8mである。護岸として20cmから60cm程の和泉砂岸を2段から3段に横積みしている。石組みの基底部の下には頑丈な丸太の胴木が横に渡されていて、一定



の間隔で打たれた杭によって固 定されている。北東隅では長さ 約1.0m、幅約0.4mの板状の 結晶片岩が2枚水平に階段状に 敷かれていた。池への降り口で はないかと考えられる。また、 池の中央部には、東西約1.3 m、 南北約0.8m、深さ0.5mの長 方形の2段掘りの穴があり、池 に棲む淡水魚の越冬のための施 設だと思われる。池 (SG04) は、明王院跡調査区で発掘され た池 (SG03) が南側へと拡が っており、両者の位置関係と、 底面のレベルがほぼ同じことか ら、本来は池(SG03)と同一 のものであったのではないかと 思われる。

溜桝 (SF-01) (第9図)

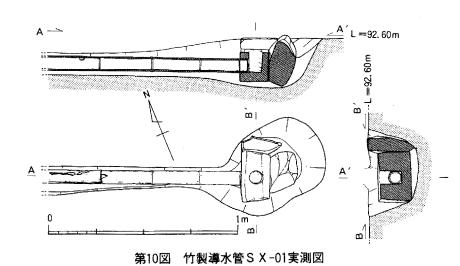
溜桝(SF01)は菩提院跡調査区で検出した石積みの施設である。平面は長方形であるが、東西両長辺の中央部は土圧によるものか内側へせり出していた。規模は南北約3.0m、東西約2.0m、深さ約0.8mを測る。SF01の構造は2段掘りして、その上段の掘形に、約20mから30m大の和泉砂岩を3段乃至は4段に内側に面を揃えて小口積みにして四辺を築き、下段の掘形の表面には淡灰黄色の粘土が張られていた。石組みの間にも部分的に淡灰黄色粘土が詰められていた。石材の四隅での組合せと、目地の通りから推察すると、四辺を同時に一段ずつ積み上げたのではなく、まず北壁を2段から3段で築き、次に東壁を3段から4段で一挙に築いたようである。そして続いて南壁と西壁が2段から3段で築かれたようである。北壁と東壁は比較的大きさの整った石材でかなり丁寧に積まれているが、南壁と西壁は石材の大きさが不揃いで、やや乱雑に積まれている。北西隅には流入口とみられる石組みの溝が斜めに造り付けられており、南西隅は石組みが無く、SF01の排水溝であると考えられる溝(SD14)が南に続いている。SD14は幅約0.8m、深さ約0.15mのU字形の溝に挙大の和泉砂岩を充塡した暗渠で、SF01より南に延びた後、東に直角に折れ曲り調査区外に続いている。溜桝は貯水施設であると考えられるが、どのように機能していたかは不明である。



第9回 溜桝SF-01実測図

竹製導水管 (SX-01) (第10図)

竹製導水管(S X 0 1)は旧菩提院跡調査区北東部で検出した竹を埋設した導水管である。直径約12 cmの竹の節を刳り抜いて水が流れるようにし、東端は2石の和泉砂岩によって固定された長さ25cm、幅15cmの木製の角材(駒)に接合していた。竹は長さ約4.2m残っていたが、西半部はほとんど腐朽していた。駒には竹を接合する側面と上面に円形に穴を穿ち、上面にも竹筒が接合されていたようである。本調査区では江戸時代以降の井戸跡が検出されておらず、山裾の谷川から水を導いてきたと考えられるが、今回検出した遺構はその一部ではないかと推測される。また、木製の駒の西に隣接して、直径約45 cm程の桶が埋められており、水桶の役割を果たしていたことも充分に考えられる。根来寺では竹製の導



水管の検出例は昭和59年度の根来寺坊院跡第2次調査例以来今回が2例目であり、明王院側のSX02も、かなり腐朽化していたが、竹が埋設されていて同様のも谷筋や山裾のれ、今後も谷筋や山裾の調査区では検出例が増加することが予想される。

埋桶 (SX-03 · 04) (第11図)

SX03はSX01の南隣りで検出した埋桶である。掘形の規模は上端径約60cm、下端径約50cm、深 さ約40cmの円形で、桶は底部の直径約43cm、上端直径約48cmで、側板は約30cmほど残っていた。桶は5枚の底板と19枚の側板で作られており、5枚の底板はそれぞれ両端から数cmの所で長さ4cm程の鋭利な竹

A L =92.700m A'

第11図 埋桶SX-03実測図

釘で互いに合計8ヶ所連結し円板にしている。そして底板と側板 の結合部の外周には竹製のタガが一重にまわっていた。

SX04はSX03の南東約4mの地点で検出した。上端径約60cm、深さ約35cmの円形の掘形の中に、底部の直径約42cmの桶が据えられていた。桶の作りはSX03とほぼ同様であるが、底板は3枚、側板は10枚から成っていた。底板は、やはり鋭利な竹釘で、各板どうし二ヶ所づつ、4点で連結していた。

埋桶は根来寺の発掘調査においては、埋甕や溜桝などと同様に、よく見うけられる遺構である。機能に関しても、断定することはできないが、水槽あるいは便槽として使用されたのではないかと推測される。根来寺坊院跡の昭和57年度の第2次調査では、土坑(SK61)内に、直径 1.2mの桶と、直径 0.8mの2個体の桶が埋められ、その間には丹波焼の甕が、肩部まで埋め込められており、便所だと考えられている。

南北塀 (SA-01) 明王院跡と菩提院跡の間で検出した土塀の基礎の石積みである。両院を仕切っていたと考えられる土塀で、扁平な20~30cm程の和泉砂岩を3段に平積みしている。底からの高さは約0.3mで、総延長約21mを確認した。土塀の西側には幅約0.2mの側溝がある。

南北塀 (SA-02) SA01の北側で検出した土塀の基礎の石積みで和泉砂岩一段で築かれていた。SA01より一時期古い土塀と考えられる。

埋桶 (SX-05) 菩提院跡調査区の北東部で検出した南北約 1.7m、東西 1.5m、深さ約 0.7m のほぼ円形の土坑の底部に直径約70cmの桶の底板の痕跡があり、側壁から竹製のタガの一部も検出されたことから、大型の埋桶であったと考えられる。

東西溝 (SD-01) 菩提院跡調査区の南西部で検出した、丸瓦を組合わせた溝である。

南北溝 (SD-02) 菩提院跡調査区の南西部で検出した、石組溝である。幅約 0.3mで、両側は和泉砂岩を一段に横積みしていた。

土坑 (SK-02) 菩提院跡調査区の南西部で検出した長径約3.6m、短径約2.4m、深さ約1.0 m程度と考えられる土坑である。

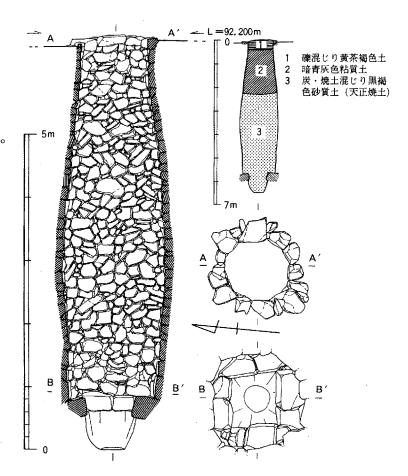
土坑 (SK-24) 菩提院跡調査区の北東部で検出した、長さ約2.2m、幅約1.6m、深さ約1.0 mを測る長方形の土坑である。掘形は2段掘りで、上端の東半部は和泉砂岩の石組が残存している。また、南西隅には杭が2本あり、溜桝の一種である可能性がある。

B下面遺構

井戸 (SE-1001)(第12図)

SE1001は旧菩提院跡調査区の南東部 で検出した石積み井戸である。南北約5.8m、 東西約 4.6mの巨大な掘形の中に20cmから40 cm大の和泉砂岩が竪牢に積まれていた。井戸 の上端より 4.0mの所では径約 1.6mを測る。 底部は長さ50cmから80cm、厚さ30cmから40cm の長方形の和泉砂岩を2個づつ、内側に面を 揃えて方形に組んでおり、その下は岩盤を0.5 mほどの深さに丸く掘削していた。この底石 の上に人頭大の石が円形に、高さ約 5.7m積 まれており、井戸の上端から底までは約6.6 mである。根来寺防院跡で、このように基底 部に大きな石を方形に組み、その上に石を円 形に積み上げた井戸は、天正の兵火以前のも のはなく、本例が初めてである。近世の例と しては、昭和56年度の第一次調査の井戸があ るが、石積みがほぼ垂直である点や、底部が 4石で構成されている点で若干異なる。

SE1001の埋土の状況は大きく3つに 分かれ、上端より 0.4m下までが礫混じりの



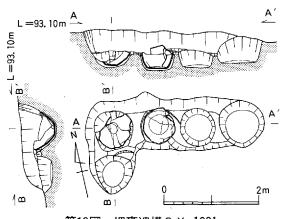
第12図 井戸SE-1001実測図

黄茶褐色土で、その下 1.9mの間は暗青灰色粘質土で、上端より 2.3mから底までは、天正の兵火の焼土と考えられる炭、焼土混じりの黒褐色砂質土がびっしりと充満していた。中層の暗青灰色粘質土からは、国産および中国製の陶磁器類や瓦類、石製品が集中して出土し、底近くの炭・焼土混じりの黒褐色砂質土からは、金属器類と木器類が集中して出土した。井戸屋形に関しては、柱穴、礎石ともに検出できず、不明である。

なお第12図の井戸(SE1001)の実測図の底部より1.6mから4.7mまでの間は略測図である。 埋**獲遺構** (SX1001) (第13図)

SX1001は菩提院跡調査区の北西部で検出した埋甕遺構である。掘形は2段構成になっており、岩盤を約0.4m程L字状に掘り窪めて、さらに大甕の底部の大きさ、形状に合わせて5ヶ所を円形に掘削していた。その上に淡灰黄色の粘土を薄く貼り付けて大甕を固定していた。埋められていた大甕は北に4個、南に1個、計5個存在したようである。北西隅とその東の掘形には、それぞれ常滑焼の大甕と備前焼の大甕の下半部が残っており、備前焼大甕の内側の底にはタール状のものが残っていた。東端の掘形は他のものよりふたまわりほど大きく、1段掘りであることから、後から甕が追加されて据えられたことも考えられる。

埋獲遺構は山内の天正の兵火に係る時期の坊院跡では多く検出される遺構で、複数の備前焼大甕を地中に埋めたものである。埋設する甕の数は、数個から10数個のものまで種々あり、1列に並べたもの、



第13図 埋甕遺構SX-1001

A 数列に並べたものがあり、上屋の構造も一様でなく、掘立柱のものや礎石をもつもの、土蔵のように周囲を壁で固めたと考えられるものもある。しかし機能に関しては、まだ解明されていない。埋甕として使われるのは、通常、備前焼の大甕であるが、今回のように常滑と備前の大甕が共用されていたのは、昭和61年度の第1次調査例に続き、2例目である。また、製作年代に関しては、常滑の大甕は15世紀代前半のもので、備前は16世紀代後半のものと推定され、常滑の大甕は何かから再利用されたようである。

井戸 (SE-1002) 池 (SG04) の北中央部の底面で検出した径約 2.5m、深さ 1.2mを 測る井戸跡である。地山をほぼ垂直に掘り抜いており、埋土は灰色の粘質土であった。少量ながら井戸 枠材が出土しており、天正以前の坊院に伴う井戸であろう。

門 (SB-1001) 菩提院跡調査区の南東部で検出した。北側の柱穴は径約65cm、深さ約60cm で、底には長さ45cmの結晶片岩の礎板が存在した。南側の柱穴は径約70cm、深さ65cmで、底には北柱穴と同様に結晶片岩の礎板が存在した。両者の柱間は約1.9 m で、簡単な構造の門と考えられる。

塀 (SA-1001) 菩提院跡調査区の中央部で検出した塀である。直径約40cmから50cm、深さ約20cmから50cmの柱穴の間を、南北 3.6mにわたり布掘していた。

塀 (SA-1002) 塀 (SA1001) の西、約 1.8mの間隔を置いて、平行に並ぶ塀である。 柱穴の間を南北約 4.2mにわたり溝状に布掘りしていた。

塀 (SA-1003) 塀 (SA1002) と一連のものと考えられる塀で、約1.95m南で検出した。南北1.65mにわたって布掘りしており、SA1002との間は通路であったと考えられる。

第1節 包含層の遺物

1. 表土・床土

表土・床土からも大量の遺物が出土している。大部分が近世の遺物であるが中世の遺物も少量見られる。遺物は肥前系の陶磁器を主体とするが、その他に京焼系と思われる片口(行平)(32)や陶質で産地不明の無釉の鉢類(33、35)、 陶質で明茶褐色の胎土に鉄釉で同心円状の文様を描き、外面体部下半を露胎で残して橙褐色の透明釉をかけた鉢(34)、 34同様の胎土で、同じ様な釉を内面と外面口縁部付近に刷毛塗りした灯明皿(36)、 内外面口縁部付近にのみ鉄釉をかけた、やはり灯明皿かと思われる美濃瀬戸系の鉄釉皿(37)、 備前焼の擂鉢、土師皿、軒丸瓦(47)などが見られる。これらは中世のものの混入を除いても17世紀後半から19世紀前半の長い時期幅が認められる。

1、2は肥前系の青磁である。1は外面に浅い片切彫の葉文を持つ鉢と思われる。草緑色でやや赤味のある薄い釉がかかるが外底の釉を蛇ノ目状にふき取る、いわゆる蛇ノ目凹型高台である。

2は外面体部に線刻の四方襷文を巡らす三足の植木鉢と思われるものである。器形的には三足の香炉であるが、底部中心部に径約6mmの孔が貫通している。焼成前の穿孔である。釉は透明感のある暗緑色で、外面体部下半及び内底は露胎で、露胎部は赤褐色に発色している。

3~26は伊万里の染付である。網代文の大形の鉢(3)や碗(4~14)、蓋物(15)、皿(16~28、 25)、蓋(19~22)、小碗(23、24)、仏飯器(26)などが見られる。なお、15の内面は口縁部付近を 除いて露胎であり、25、26の胎土は陶質である。

27は伊万里の白磁坏である。やや青味のある灰白色の釉が全面にかかり、畳付部分の釉はふき取っている。また、畳付には少量の砂が付着している。

28~31は外面体部下半を露胎で残す灰釉の小碗である。産地等は余り明らかではないが京焼系と思われるものである。やや黄味を帯びる灰白色の釉には細かい貫入が入っている。体部下半は露胎である。

38~41は備前焼の擂鉢である。内面体部全体に細く密な擂目を持つものである。41は天正の兵火直前のものの混入である。

42~46は兵火前の土師皿である。根来寺におけるこれらのタイプの土師皿は16世紀初頭頃には存在することが確認されているが、43~46の径9 cm以下の小皿は16世紀代を通じてほとんど型式変化をせず、 天正の焼土層からも大量に出土している。しかし、42の様な径12cm前後の中皿は16世紀初頭~前半期に 消滅するものと考えられている。

2. 第1層

第1層の遺物には肥前系の陶磁器や萩焼などの近世の遺物、少量の中世の遺物が見られるが、表土層、 床土出土の遺物との時期差はほとんど認められない。

48は伊万里の白磁と思われる型物の五重塔である。小形で精巧な造りである。49、50は伊万里のいわゆる青磁染付の碗である。外面には青磁釉がかけられ、内面口縁部付近には四方襷文が巡る。内底中央部にはコンニャク判による五弁花文が見られる。

萩焼の鉢(51)と碗(52)は窯跡出土のものとして知られているタイプで、根来寺での出土は非常に

珍らしい。灰白色の堅く緻密な胎土で、体部下半を残して透明度の高い灰釉と、粘質で不透明な黄灰白色の釉が二重にかけられており、体部を流れ落ちる釉は部分的に褐色の天目釉状の発色を呈している。露胎部はやや赤味を帯びている。高台は削り出し高台である。

53は赤褐色で陶質の胎土に艶のある透明の飴釉のかかる土釜である。産地等不明であるが、釉や胎土は表土・床土出土の灯明皿(36)などと類似する。鍔の下面より下位は泥漿状の釉を刷毛塗りしており、煤が付着している。

54は京焼系と思われる、灰釉の灯明皿である。胎土は灰白色で堅緻である。外面は露胎で、回転へラ 削痕を残している。内面の受部には灯心を置く為と思われる切込みがある。55は京焼系もしくは肥前系 と思われる外面体部下半を露胎で残した灰釉の皿である。内面には細いへラ先による鋭い直線文を櫛目 状に施している。外面体部には「□月卅□」の墨書銘が見られる。

56は中国製の褐釉双耳壺である。一般的なものに比してやや軟質の黄白色の胎土で、釉は黄褐色を呈する。内面は口縁部付近にのみ施釉され。体部は無釉である。

3. 第2層

上面遺構の直上層である。伊万里の三足香炉(57)など若干の近世の遺物も見られるが、中国製天目 茶碗(58)や土師皿(59~64)など天正の兵火以前の中世の遺物も多く出土している。

58の天目茶碗は体部下半の器肉が一般のものより薄い。釉は禾目状を呈する。

65は瓦質の擂鉢である。厚い器肉で、あまり見ない器形であるが中世のものと思われる。櫛目は深く刻まれ、4条8単位である。内面体部は粗い指ナデで調整され、外面体部は縦方向の粗いヘラ削りのままである。内外面とも口縁部付近のみョコナデを施している。

4. 第3層

第3層からは少量の中世の遺物が出土している。この層は上面遺構の遺構面で、これより下層には近世の遺物は見られない、なお、調査区北側の山際には第3層以下は見られず、岩磐の上に第2層以上の土が堆積していた。

66は瓦質片口のこね鉢である。浅く幅広の櫛目を内底まで密に施している。内面口縁部付近には刷毛を横方向に施し、外面口縁部付近をヨコナデの後、外面体部を斜方向に粗くヘラ削りしている。

67は瀬戸灰釉おろし皿である。黄緑色の薄い釉が内外面口縁部付近にのみかけられている。体部は大きく外反し、立ち上がりの弱い器形で、ヘラ先によるおろし目は比較的浅い。底部の切離しは回転ヘラ切りである。

68は土師皿で、いわゆる白土器である。

5. 第4層

調査区北側一部と南西隅を除くと、この第4層が下面遺構の直上層である。比較的古い時期の遺物が 多く出土する。第3層及び次項の第5層共々天正の兵火直後の火事場整理の際の整地層と思われる。

美濃瀬戸系の陶器や土師質の鍋類、多数の瓦器椀や土師皿等が出土している。また、1点であるが石 鍋も出土している。

70は土師質の釜である。胎土は粗く片岩や石英質の砂粒を多く含む。内面口縁部付近と外面鍔下部までヨコナデを施す。71・72は土師質の鍋である。胎土は70同様に多くの砂粒を含む。内外面口縁部付近にのみヨコナデが施されている。外面には煤の付着が認められる。器形的には大和型といわれるものに近い。

73は滑石製の石鍋である。外面の鍔より下部には粗いナイフの痕跡が見られる。

74~77は瓦器椀である。器高が高く高台や暗文の比較的しっかりしたもの(74・75)や、器高が低く申し訳程度の退化した高台で、暗文もほとんど見られないもの(76・77)が混在する。78は瓦器皿である。口縁端部付近に強いヨコナデが施されており、外底には指頭圧痕を残している。

79~86は土師皿である。径12cm前後の中皿(79・80)と 9 cm前後の小皿(82~86)がある。80はやや 黄味のある胎土で口縁のやや内弯するタイプである。内面を不定方向にナデ、内外面口縁付近を丁寧な ヨコナデで調整している。外底にはわずかに指頭痕が見られるが、比較的きれいに指ナデを行っている。

6. 第5層

この層は調査区南西隅でのみ検出された。遺構の空白地のため下面遺構との関係は不明確であるが、 遺物の組成は第4層と類似しており、おそらく、第4層と同様の性格を持つものと思われる。土師質釜、 瓦器、土師皿などが出土している。

87・88は土師質の釜である。暗茶褐色の胎土は比較的密である。砂粒等はほとんど含まないが少量の (数細な雲母粒が見られる。大和B型と呼ばれるものと器形が酷似する。内面体部は丁寧なヘラ削りで、 口縁の屈曲部から外面鍔の下部までヨコナデが施される。外面には煤が付着している。

89は瓦器の片口である。ややバチ状に外反する断面台形の比較的しっかりした高台をもち、磨耗するが、内底には平行暗文が見られる。内外面口縁付近と高台部にヨコナデが施されている。90・91は瓦器 椀である。磨耗して暗文等は余り明らかではない。断面三角形の高台がつく。92は瓦器皿である。内底を不定方向にナデ、内外面口縁部を強いヨコナデで調整している。外底は未調整で指頭圧痕を残す。

 $93\sim98$ は土師皿である。径 9 cm を前後するものであるが、器高が 2 cm 前後のもの($93\cdot94$)と 1.5 cm 前後のもの($95\sim98$)とがある。

第2節 遺構の遺物

1. SG01

「菩提院」の院名と「無案内之者此内江不可入事」の墨書名のある木札(99)や京焼系と考えられる 高台付近が露胎の灰釉碗(100)、備前焼擂鉢(101) などが出土している。

2. SG02

上層、下層に遺物の時期差は認められない。上層からは伊万里染付碗(102~106)・ 蓋(107) 小杯(108)・ 仏飯器(109)、土師質で外面に煤の付着した焙烙(110) などが出土している。

下層には伊万里染付碗(111~113、115~123)・蓋(123)、陶質の胎土を持ち、畳付に砂の付着する産地不明の染付碗(124)、内面に青釉がかかり、内底の釉を蛇ノ目状に削り取った唐津の皿(125)、京焼系と思われる黄白色の釉をかけ、緑、赤、青などの上絵付をした碗(114)、土瓶(126)、「奉迎」の墨書銘の見られる木札(127)、柄杓(128)などの遺物が見られる。

3. SG03

出土遺物は少ない。蛇ノ目凹型高台を持つ伊万里染付皿(129)・蓋(130)、内面に飴釉を刷毛塗した灯明皿(131) などの近世の遺物に混じって兵火以前の土師皿(132~134) が出土している。なお、134は白土器である。

4. SG04

伊万里の染付瓶 (136)・皿 (137) や中国製青磁碗 (135) が出土している。

135は灰黄色の釉で外面高台付近より下部は露胎である。

5. SF01

138は素焼きの土製五輪塔の火輪の部分と思われるものである。

139・140は京焼風の唐津釉碗である。体部下半は露胎で、内底の釉を蛇ノ目状に削り取っている。 釉色は京焼のものに比べてやや灰味が強い黄白色である。

6. SK02

唐津系と思われる輪花皿(141) や外面体部に「□見□」の墨書の見られる唐津碗(142)、京焼系の灰釉小碗(143)、備前焼の瓶(147)・甕(150)、中国製陶磁器(145~147)、 美濃瀬戸系天目茶碗(148)、常滑焼の甕(148)、口縁に波状の文様帯を貼り付けた瓦質の甕(152)、軒平瓦(151)、砂岩製地蔵尊(153) などが出土している。

145 は青磁碗である。外面は無文で口縁部がやや内弯するタイプのものと思われる。外底の釉を蛇ノ目状に削り取っている。内底には顧氏銘が見られる。

146は16世紀に通有の端反り白磁皿である。このタイプのうちでは新しい方に属する粗製のものである。 147は牡丹唐草文の端反りの染付皿で、内底には「顧氏」銘が見られる。

7. SK14 · 15 · 16 · 21 · 22 · 23 · 24 · 25 · 26 · 27

S K14・15からは土師質皿が出土している。共に口縁部の強いヨコナデに特徴のある通有の16世紀タイプのものである。

S K16からは伊万里染付などと共に比較的多量の中世の瓦が出土している。

軒平瓦 156、 157は同笵と考えられるものである。便化した唐草文と中心部に宝珠文が見られる。158 は巴文の軒丸瓦である。巴は先端がやや尖り、尾は長い。また、珠文も小さい。

S K21出土の 159は美濃瀬戸系の褐釉の碗である。体部下半は露胎で茶褐色の釉がかかる。 160は京焼系の高台付近から下を露胎で残した灰釉の碗である。黄灰白色の釉には細かい貫入が見られる。 161は伊万里の白磁小碗である。全体に細かい貫入が見られる。全釉で畳付部分の釉をふき取っている。

S K22出土の焙烙(162) は赤褐色の緻密な胎土を持つものである。薄い造りのもので 2 ヶ所の外耳には各々 2 ヶ所の穿孔が見られるが、孔は貫通していない。

S K23からは伊万里染付碗(163) が出土している。外面体部には濃筆で草花文が描かれる。

S K24からは伊万里染付蓋物(164)・ 仏飯器(170) などの近世の遺物や中世のものと思われる備前焼徳利(166) が出土している。

S K25出土の水指(167) は中世の遺物と思われるが他に近世の遺物も少量出土している。

S K27からは伊万里染付碗(169)・ 仏飯器(170)・ 蓋(171)・ 肥前系の灰釉碗(172) などが 出土している。

172は全釉で畳付部分の釉をふき取ったものである。

S K26からは備前焼の擂鉢(168)などが出土している。

8. $SD05 \cdot 08 \cdot 14$

SD05からは土師器の椀(173)や唐津系の灰釉碗(174)が出土している。 174は体部下半が露胎で、内底の釉を蛇ノ目状に削り取るものと思われる。

SD08からは備前焼擂鉢(175) や不明墨書銘のある京焼系の灰釉皿(176) などが出土している。

SD14出土の瓦(177) は巴文の軒丸瓦である。磨耗が激しいが中世のものの混入と思われる。

9. SA01

伊万里染付皿(178 · 179)・碗(180)・蓋(181)、備前焼擂鉢(182)・水指(183)、京焼系の灰釉灯明皿(184) などの他に大量の瓦類(185~199) が出土している。又、側溝からは土師皿(198) などが出土し、掘形からは焙烙(199) などが出土している。

瓦は軒丸瓦 (185~191)・軒平瓦 (192~194)・丸瓦 (195~197) などがある。大部分が近世 のものであるが、 187の巴文軒丸瓦など少量の中世の瓦も見られる。

10. SE1001

中層 SE1001の埋土のうち、暗青灰色粘質土層を中層として遺物を取り上げた。遺物には中国製の 青磁・白磁・染付をはじめ、美濃瀬戸系の陶器、瓦、五輪塔、土師皿などがある。

200は中国製の青磁蓮弁文碗である。やや腰の張った器形である。蓮弁はへら先による線描きで、剣頭の表現を省略している。全釉で外底の釉を蛇ノ目状に削り取っている。

201~211は白磁の皿である。 203はやや古手のもので、外面体部下半に回転へラ削りの痕跡を残している。全釉で畳付部分に硅砂状のものの付着が認められる。釉色はやや灰味を帯びるが透明度が高く光沢がある。 204~209 は一般に16世紀タイプと言われる端反りのものでは新しい部類に属するものである。釉、造り共にやや粗製である。釉は黄味や灰色を帯び、徴細な黒班の混じるものが多い。

210 は高台を持たない小皿である。全釉後に外底の釉を深く蛇ノ目状に削り取っている。灯明皿として使用されたと思われ、口縁部にタールが付着している。 211は型押の菊皿である。釉は火事で焼けて飛んでいるが本来は内面と外面体部上半にソーダ釉のかかるものであった可能性が強い。

212~220 は染付である。 212は元様式の牡丹唐草文の植木鉢で、底部中央には焼成前の径約3 cmの穿孔がある。内面は無文で、口縁部でかけられた釉が自然に流れ込んでおり、外底は露胎である。露胎部との境は赤橙色に発色している。外面体部の文様は中央に精緻な牡丹唐草文を巡らし、口縁部には唐草文、体部下半には波濤文が見られる。現在、元様式の染付の出土報告は十指に余るほど増えているが、おそらく植木鉢の出土は初例と思われる。 213は鏝頭心型の底部を持つ碗である。内底には仙人を描き、外面体部には雲文や草花文が見られる。外底には便化した「富貴佳器」銘が見られる。 214~ 216 は皿である。 214、 215はやや小振りのタイプの端反りの牡丹唐草文の皿である。内底には羯磨文が描かれている。 216は端反りの比較的大型の皿である。外面は無文であるが内底には濃筆で草花文が描かれている。外底は無釉である。 218、 219は盃である。外面体部及び内底に草花文が見られる。 220は瓶である。口縁が水平に外反し、小型の玉壺春の様な器形と思われる。外面の文様は草花文と思われる。

221~224は美濃瀬戸系の灰釉皿である。全釉で外底に輪陶枕痕が見られる。

瓦には鬼瓦 (225 ~ 227)・軒丸瓦 (228 ~ 230、 233)・鳥衾瓦 (231、 232) などがある。 228 ~ 230、233は非常に珍らしい鳳凰文の軒丸瓦である。

砂岩製五輪塔の地輪(234、235)のうち、234は梵字や蓮弁の線刻に漆で金箔を張った痕跡が見られる。金箔押しの五輪塔は根来寺では初例である。

下層 井戸の底から約 4.2mにわたってびっしりと焼土層が堆積していた。この焼土層を下層として 遺物の取り上げを行ったが、中層粘質土層との時期差は認められなかった。中国製白磁皿 (236) や美 濃瀬戸系灰釉皿 (237)、土師質 (238)、鉄製の小札状のもの (239)、粘板岩製の小型の硯 (240)、 鉄釜と五徳、棕櫚材を槌部に使った掛失 (243) などが出土している。

241の鉄釜と 242の五徳は日用品ではなく、湯立の神事などに使用されたと思われるものである。大

和型とされる土師質の釜に口縁端部の形状が類似するものがあり、土師質や瓦質の鍋、釜の祖型を考察する上で非常に重要な遺物である。

掘形 掘形の遺物は少量の土師皿のみである。 244、 245は共に根来寺に通有の16世紀タイプと言われる径 9 cm内外の小皿である。根来寺での、特に16世紀代の土師皿の型式変化はほとんどないが、少なくともこのタイプの土師皿が16世紀初頭には存在する。

11. SE1002

この遺構は上層遺構の池の底で検出されている。素掘りの井戸であるが、伝世品と思われる白磁四耳壺 (246)を除いて遺物は15世紀初頭前後の一括資料と言え、下層遺構より更に古い時期から調査地区に塔頭等が存在したことを示している。

247、248は白色系のやや内弯する器形の土師皿である。内面を不定方向にナデ、内外面口縁部にのみヨコナデを施す。外面体部は指頭圧痕を残して無調整であるが底部は指ナデにより平らにしている。249~255 はいわゆる白土器の皿である。瓦器椀消滅後に出現し、根来寺に特徴的な遺物であるが、最近泉南地方での出土も報告されている。249~252 は中皿で253~255 は小皿である。なお、255はややヘソ皿風である。内底部に一定方向のナデを施し、内外面共体部全体にヨコナデを施す。ヨコナデは全周の後斜上方に引き上げられている。外底は丁寧に指ナデされており、指頭痕はほとんど見られない。249には内外面に煤の付着が認められる。256は白色系の土師大皿である。口縁付近を広い巾でヨコナデし、体部にはわずかに指頭痕を残すが比較的きれいに指ナデで調整している。

257は大和型に類似する土師質鍋である。

258、 259は東播系魚住窯のものと思われる須恵質片口である。 261はやや酸化焰焼成気味で暗赤褐色を呈す。

260は漆塗の椀である。高台の低い器形で、内外面共黒漆が塗られ、装飾文は見られない。根来寺で 出土する漆塗椀皿類はこの時期以降のものが多い。

12. S X 1 0 0 1

埋甕遺構で、調査区北側山際で第2層以下に検出されたが、天正の兵火にかかる時期の遺構である。使用された甕のうち2個体の底部が原位置を保っていた。うちの一つは15世紀初頭頃の常滑焼の甕270で、いま一つは16世紀後半の備前焼の甕である。常滑焼は古い時期のものの転用と思われるが、根来寺でこの種の遺構に備前焼以外の甕の使われた2例目である。遺構は天正の焼土で埋っており、出土遺物も中国製青磁・白磁・染付、備前焼、常滑焼、信楽焼、土師皿、瓦などが豊富である。

261、262は中国製の青磁である。 261は大型の稜花鉢である。体部上半でほとんど水平に近く外反し、広い平坦部を持つ段皿風の器形である。釉は暗緑色を呈し透明感が強い。全釉で外底の釉を蛇ノ目状に削り取っており、露胎部は赤燈色に発色している。内面には櫛状器具による雲文と浅い片切彫の花文が見られる。 262は深い器形の中国製青磁三足香炉と思われたが、底部中央を穿孔しており、植木鉢のようである。内外底中央を露胎で残し、草緑色の釉が薄くかけられている。外面体部は中央に型押しの深い牡丹唐草文が見られ、上端部にもやはり型押しの雷文帯が巡っている。又、体下部の脚部の付根付近には小さな五弁花の貼花が見られる。獣脚の表現は簡略化されたもので、底部より浮いた位置に取り付けられている。

263は中国製の染付盤である。内外面共太い濃筆による牡丹唐草文が見られるが、根来寺の兵火直前の頃に見られるいわゆる呉須手の盤とは様相が異なり、外底にも放射状の鉋痕が見られることなどから、

16世紀中葉以降に見られる口縁の内弯するタイプの皿の時期のものと考えられる。

264~268は備前焼である。264、265は小型の壺で、264には肩部に櫛描によるゆるやかな波状文と筋線文が巡る。266は大型の水屋甕である。体部に断面三角形の凸帯と双耳のつくタイプである。

267、 268は備前焼大甕の口縁部である。 267は底部が原位置を保っていたものの口縁である可能性が強い。

269、 270は常滑焼の甕である。根来寺における常滑焼の出土は、器種が甕に限定され、出土時期の 下限も 270の時期である。

271は信楽焼の大型の壺である。根来寺出土の壺類は大部分が備前焼で、信楽焼や丹波焼の壺が稀に出土する。又、その器形も大型のものに限られる。これらは、おそらく中国製の褐釉四耳壺、いわゆるルソン壺と同様に、葉茶の容器すなわち葉茶壺として搬入されたもので、そのために陶器自体としては流通圏外にあるものが例外的にもたらされたものと思われる。

13. SD1003 · 1007

溝からの出土遺物は少ないが、若干の土師皿類が出土している。 278、 279共、口径 9 cm前後の16世紀タイプとされるものである。

14. SA1002

ピット内の遺物も少量である。 280は鬼板の鰭と思われるもので、線刻で花文が描かれている。 小結

出土する遺物は多岐にわたり、出土量も多いが、時期幅も比較的広く、又、整地層や整地に伴って埋められた遺構が大部分であるため、遺物の一括性は低い。

表土、床土、第1層はほとんどが17世紀後半~19世紀前半の遺物で、少量の兵火以前の遺物が出土するのみであるが、上層遺構の直上層である第2層では中世の遺物が主体で若干の近世の遺物が認められる。又、その直下に検出される上層遺構では近世の遺物を主体としながら相当数の中世の遺物が混入しているという状態である。これは表土~第2層、遺構の埋土も含めて、上層遺構の廃絶と共にほとんど同時に整地されたためと思われる。又、その際には更に下層の第3層も削平を受けたものと思われる。

第3層、第4層、第5層についても同様のことが言える。これらは下層遺構上の包含層にもかかわらず下層遺構より古い時期の遺物を大量に伴なっている。このことから考えられるのは、地山面で検出される天正の兵火にかかる時期の遺構である下層遺構は、更に古い時期の遺構を壊して営なまれ、この段階では古い時期の遺構を含む層がプライマリーな状態であれ、動かされた状態であれ、相当量残されており、その層が兵火後の火事場整理で下層遺構上に削平整地されたということである。

下層遺構の遺物は、特にSE1001の様に天正の焼土層と共に一括投棄された遺物は、少なくとも兵火時に同時に使用されていたものとして同時性の高い遺物群ではある。しかし、遺物のいわゆる一括性は余り高くなく相当の時期巾が認められる。出土した遺物で唯一一括性が高い資料は、SE1002出土の遺物群である。下層遺構と、第4・5層で出土した古い時期の遺物群の間に位置する瓦器椀消滅直後の時期の遺構であり、後に埋甕として転用された常滑焼甕 270などもこの時期のものである。

これらを要約すると、調査区には瓦器の存在する13~14世紀代の遺構、瓦器消滅後の15世紀代の遺構が存在し、これを地山面まで削平して、古い時期を含む層を一部に残したまま16世紀代に坊院が営なまれ、兵火直後に整地が行なわれたことになり、更に17世紀後半に坊院が再建され、これが廃絶した19世紀前半に兵火直後の整地層の削平を含めた整地が行なわれたことになる。(参考文献 ④~②)

第V章 ま と め

前章までに、遺構や遺物などについて報告してきたが、これらを通して、今回の発掘調査の成果を簡略にとりまとめてみたい。

調査区域は西側が近世の菩提院跡にあたり、東側が近世の明王院跡の西部にあたる。菩提院跡調査区では三時期に大別できる遺構が確認されており、少なくとも、頼瑜が高野山から根来寺へ寺籍を移した時期の13世紀末から14世紀に営まれた坊院と、天正の兵火にかかる時期に営まれた坊院と、兵火後の復興のピークを迎えた近世後期に営まれた坊院の、3つの寺院が時期を異にして建っていたことが判明した。しかし残念なことに、いずれも各坊院跡の中枢部が相撲場の造成工事によって完全に破壊されていたため、断片的な資料しか得られず、各時代の坊院の建物の数や配置、園池の構造などを復原することは不可能であった。個別の遺構に関しては、井戸や埋甕遺構等で新たな知見を得ることが出来た。遺物においては、鉄製の釜と五徳が出土し、貴重な資料を提供した。明王院跡調査区では近世後期の遺構しか検出できなかったが、南側の現存する池(SG04)を調査した際に15世紀前半頃の土器を出土した井戸跡と考えられる遺構を池の底部で検出しており、調査区の南側には、この時期に坊院が営まれていた可能性がある。次に各時代の発掘された遺構をもとに、菩提院跡調査区、明王院跡調査区に分けて、各時代の坊院の様子を推定復原してみたい。

菩提院跡調査区の13世紀末から14世紀にかけての時代の主たる遺構は、調査区南東部の柱穴群である。 SB1001は、柱穴が同規模で共に結晶片岩の礎板を底に埋めており、他に対応する柱穴がみられないことから門跡であると考えられる。SA1001は門(SB1001)の西約3.0mを南北に延びる短い塀で、さらに西に1.8mの間隔を置いて南北に続く塀(SA1002)と塀(SA1003)が確認された。SA1002とSA1003の間は、布掘りが途絶えており、また門(SB1001)の真西に位置することから出入口に当たるのではないかと考えられる。このような推察が許されるならば、13世紀末から、14世紀にかけて、当地に存在した坊院は、南東部に門を有し、東辺には塀をめぐらしていたことになる。

天正の兵火時の主たる遺構は井戸(SE1001)と埋甕遺構(SK1001)のみであり、当時の坊院の建物や他の施設がどのようなものであったのかを知ることは不可能であった。ただ敷地面積は旧菩提院跡調査区のほぼ全域を占め、先ほど推察した13世紀末から14世紀の坊院跡より規模は大きかったようである。また個々の遺構としては、井戸(SE1001)と埋甕(SK1001)は共に類例の少ないタイプで、新たな資料を加えた。従来、埋甕は井戸の近辺で検出される場合が多く、水に関連した施設ではないかとも指摘されていたが、今回は直線距離にして約30mほど離れており一概にそう断定することは出来ず、埋甕遺構の機能に関しては今後の資料の増加を待ちたい。

近世の菩提院の遺構は、池跡や溜桝は残されていたが建物は削平されており、復原することは出来なかった。池(SG01)や溜桝(SF01)の配置からみて、現在の土俵のあたりに建物の主体部があったのではないかと推測される。個々の遺構では埋桶や溜桝が検出されたが、どのような機能を有していたかは充分に理解することはできなかった。また、竹を利用した導水管が発掘され、井戸を確認することが出来なかったことから、谷筋から竹樋等で水を導いていた可能性があり、溜桝や各種の溝を含めて、山内の坊院跡の水利関係を再考する必要があろう。

明王院跡調査区では、発掘区域が、寺域の西約½か½程度と考えられ、建物は検出されなかったが、坊院の西端の土塀が確認された。また、現存する池(SGO4)が本来は、北へ約 6.5mほど続いていたことが判明した。

参 考 文 献

- ① 『和歌山県史·考古資料編』
- ② 辻林浩・上田秀夫 「第3部考古」 和高伸二 「第1部歴史」 『根来山誌』 昭和61年
- ③ 安藤精一・五来重監修 『和歌山県の地名』
- ④ 菅原正明 「畿内における土器の生産と流通」『古文化論叢藤澤一夫先生古稀記念論集』 昭和58年
- ⑤ 『龍泉青磁』 文物出版社 1966
- ⑥ 『新安海底文物』 國立中央博物館 1977
- ⑦ 『根来寺坊院跡発掘調査概報 [~Ⅲ』 和歌山県教育委員会 1977~1979
- ⑧ 『朝倉氏遺跡発掘調査概報告書 I』 福井県教育委員会 1979
- ⑨ 『昭和55~61年度 根来寺坊院跡』 和歌山県教育委員会 1980~1987
- ⑩ 『貿易陶磁研究』No.1~7 日本貿易陶磁研究会 1981~1987
- ① 『中・近世瓦の研究』 元興寺篇 元興寺文化財研究所 1982
- ⑫ 『1949―1981近年発見の窯址出土中国陶磁展』 出光美術館 1982
- ③ 『新安海底引き上げ文物』 東京国立博物館 中日新聞社 1983
- ⑭ 『近世社寺建築の手びき』 みかたと調べかた 日本建築史研究会 1983
- ⑤ 『日本出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館 1984
- ⑯ 『近世城館出土の陶磁』 愛知県陶磁資料館 1984
- ① 『木村コレクション 古備前図録』 岡山県教育委員会 1984
- ⑱ 『尾道中世遺跡』 一発掘10年のあゆみー 尾道市教育委員会 1985
- ⑨ 『日本の古窯』 岡山県立博物館 1986
- ② 『朱漆』「根来」その用と美 堺市博物館 1986
- ② 『白磁の美』中国・朝鮮・日本・現代 佐賀県立九州陶磁文化館 1986
- ② 『研究紀要 6』 愛知県陶磁資料館 1987

註

- ① 和歌山県教育委員会 『根来寺坊院跡』 昭和59年
- ② 和歌山県教育委員会 『根来寺坊院跡』 昭和57年
- ③ 和歌山県教育委員会 『根来寺坊院跡』 昭和58年
- ④ 和歌山県教育委員会 『根来寺坊院跡』 昭和61年
- ⑤ 菅原正明 「畿内における土器の生産と流通」『古文化論叢藤澤一夫先生古稀記念論集』 昭和58年
- ⑥ 註⑤に同じ
- ⑦ 註⑤に同じ
- ⑧ 註⑤に同じ

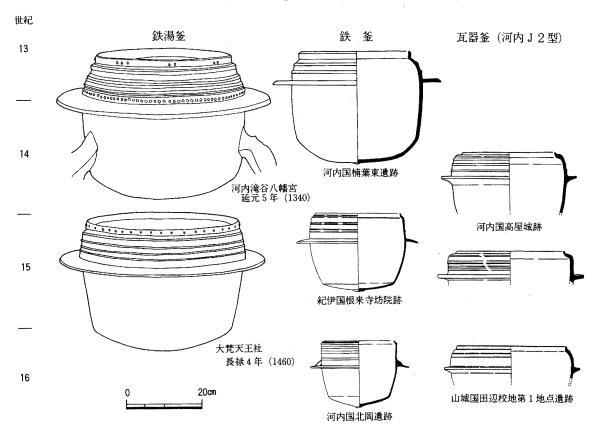
付 論 根来寺坊院出土の鉄釜と五徳

井戸SE1001から鉄製の釜と五徳が一緒に出土した。この鉄釜は小型であり(口径22.5cm、器高20.5 cm)、ご飯を炊く釜として使用されたとも考えられるが、その形態が大型の湯釜に近く、一緒に使用されたと思われる五徳(高さ45cm,脚幅5 cm,脚厚3 cm)が特に大きいこと、また絵巻物によると、一般の煮炊きの場合、鍋は小型の五徳にかけ、釜は竈(ヘッツイ)にかけて使用していることから、このたび出土した鉄釜・五徳は神社の社頭で使用された湯釜と同用途をもつものと考えられる。このことは坊院内において湯立ての儀式が行なわれたことを示しており、根来寺坊院内における神仏習合の事例の一端を見るのである。

この鉄釜と同形態の瓦器釜(河内 J 型)が大阪府下、特に旧河内国で多く出土している。ここで14世紀以降の河内国における土釜についてみると、伝統的に製作されていた土師器釜B型にとって替るかのように新形態の瓦器釜河内 D $1 \cdot D$ 2 型が出現し、次いで瓦器河内 J $1 \cdot J$ 2 型が続いている。河内 D 1 型は鉄釜を写したものであることは前回述べたが、河内 J 2 型についてもその形態から鉄釜を写したものであると見られる。河内 J 2 型の頸部装飾は、14世紀代のものは頸部外面に3 つの凸線をめぐらしているが、15世紀になるとこの凸線は低くなり、また凹線状を呈するものもある。しかし16世紀になるとこの凸線は沈線に変っている。

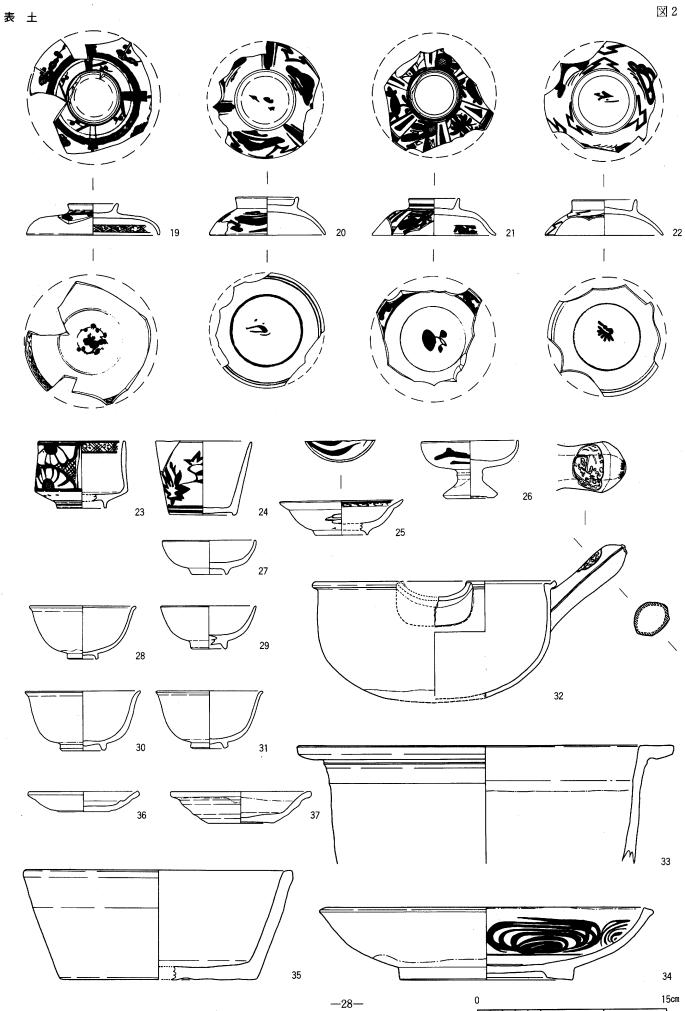
近年、河内国で湯釜の形態に近い鉄釜が2点出土しており、これらの鉄釜は河内の鋳物師により製作されたものと考えられる。根来寺から出土した鉄釜はこの鉄釜の形態に近く、同じく河内の鋳物師によって製作された可能性が高い。その製作時期は瓦器釜河内J2型の編年的位置から見ると15世紀前半と推測される。

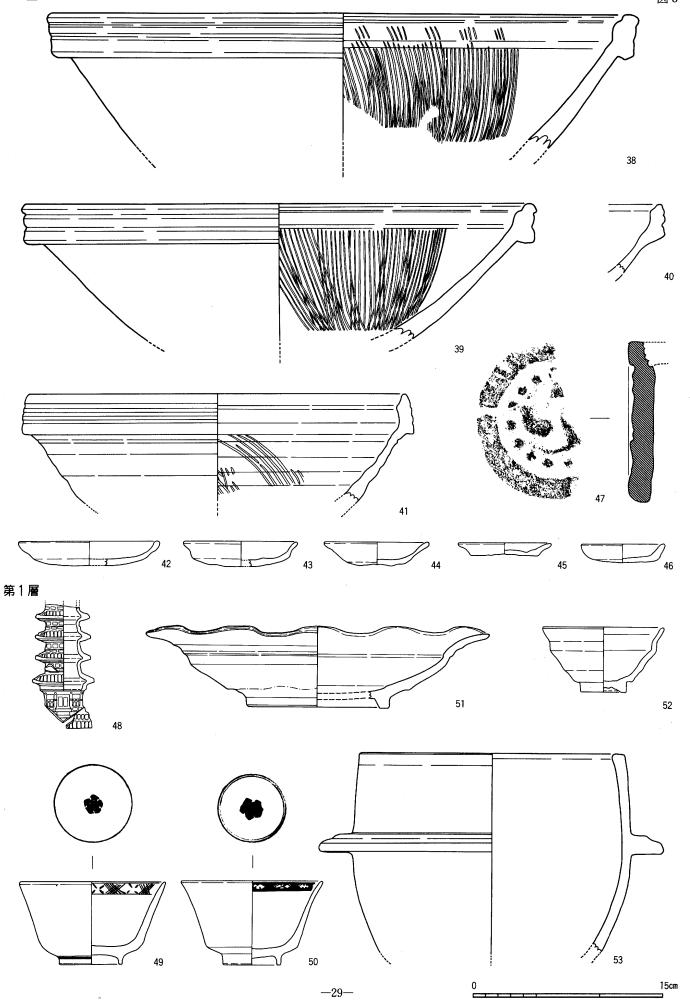
註 今回、土釜の資料の増加にともない前回分類した瓦器釜河内J型をJ1型とJ2型に細分した。 (菅原正明 「畿内における土釜の製作と流通」723 — 734 頁 『文化財論叢』 1983年)

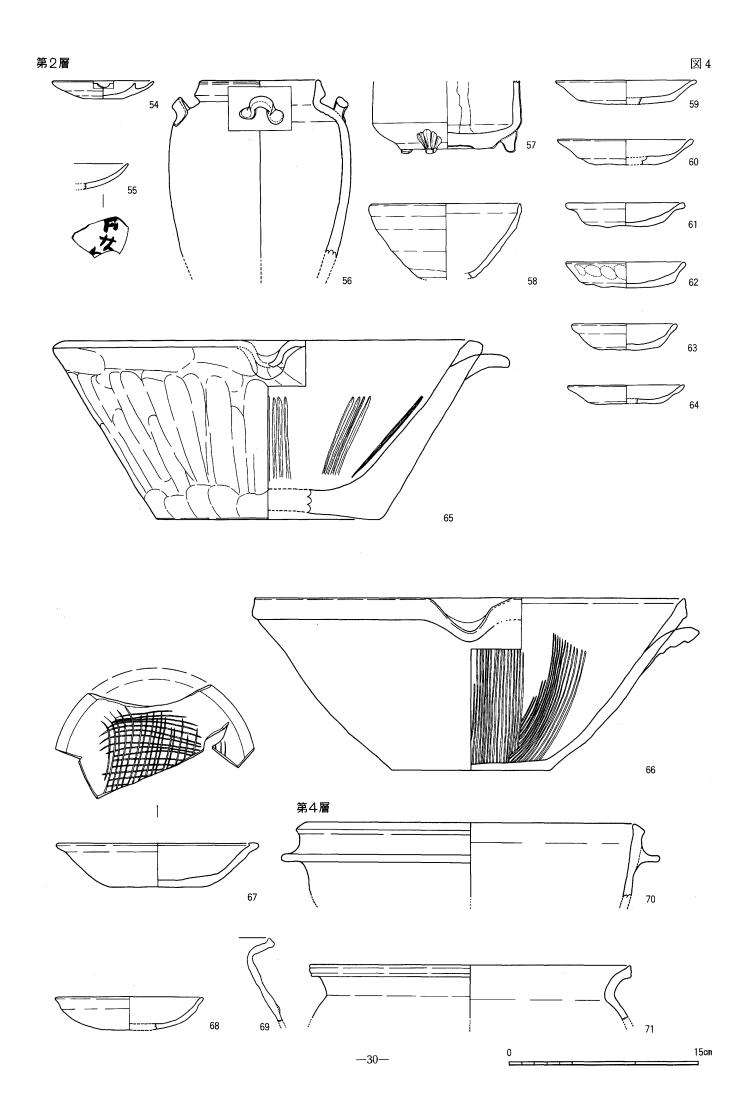


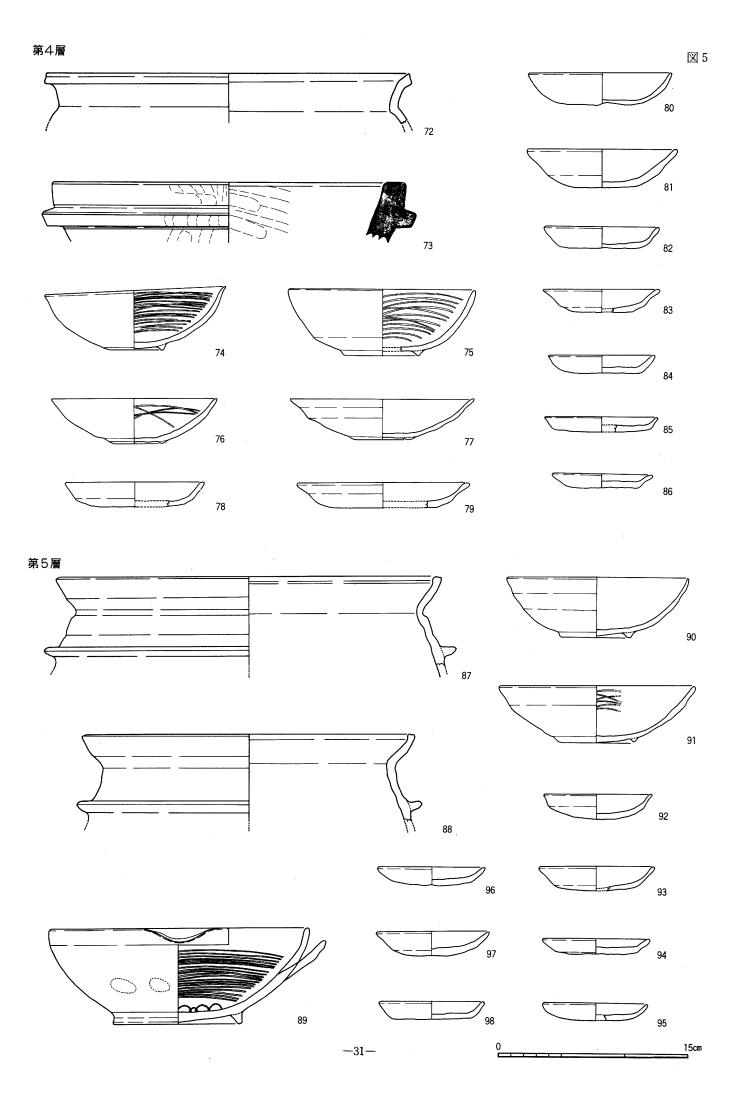
-27-

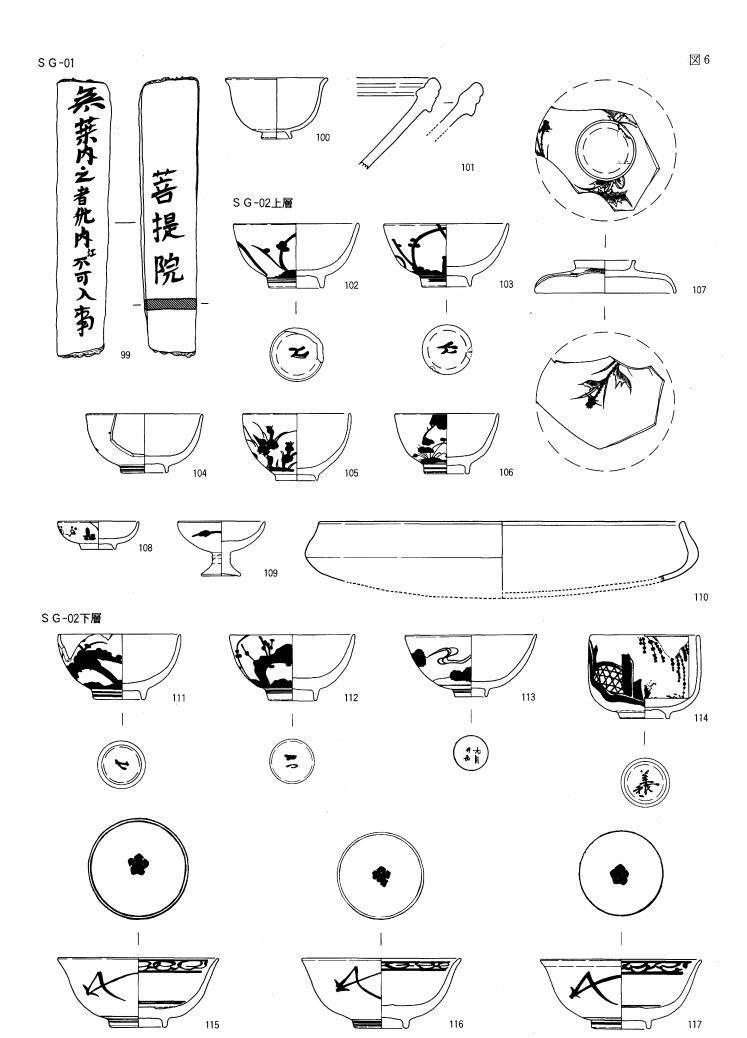
15cm





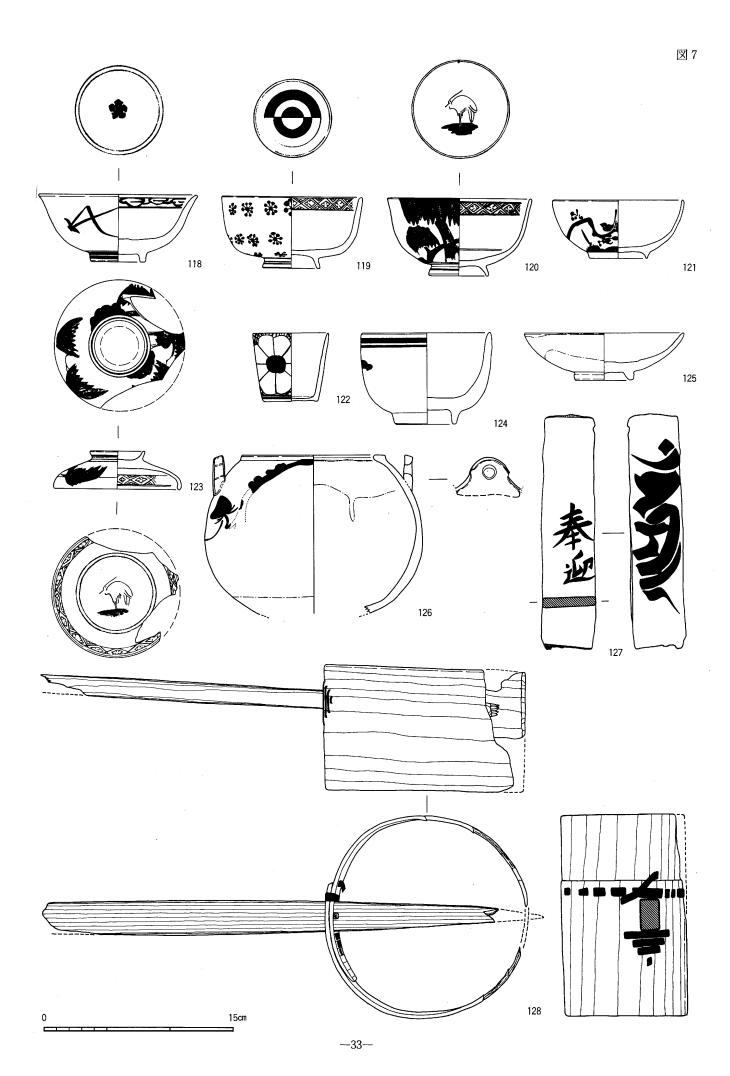


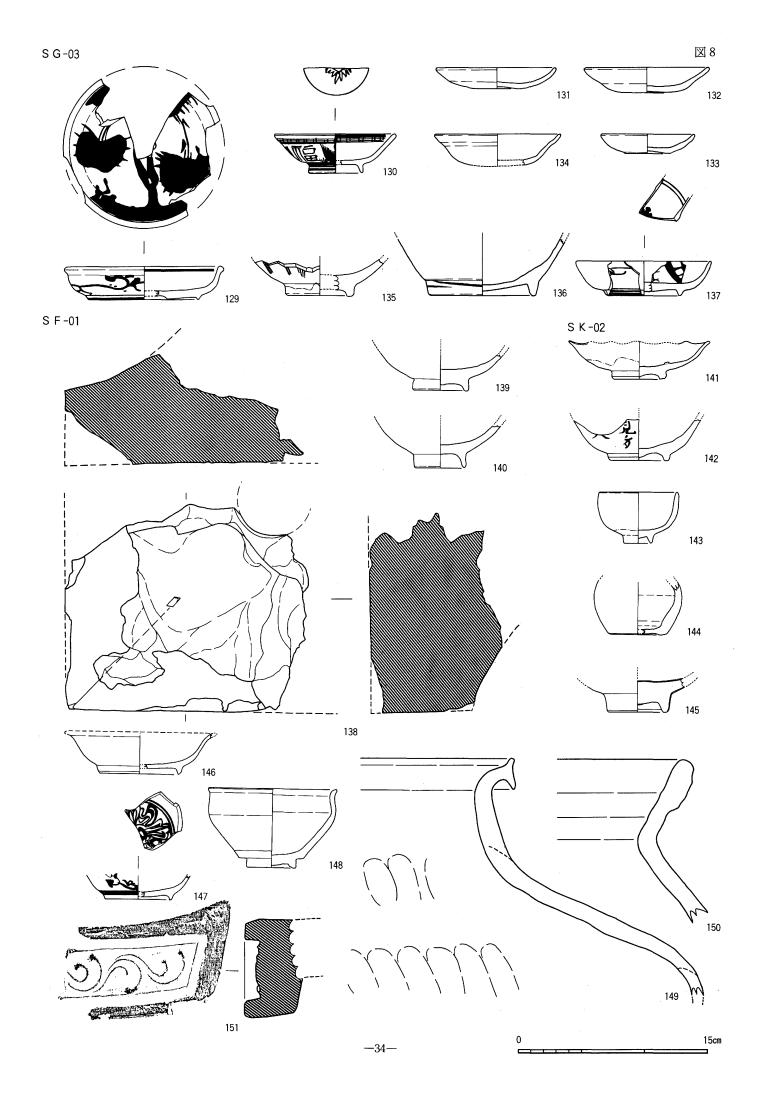




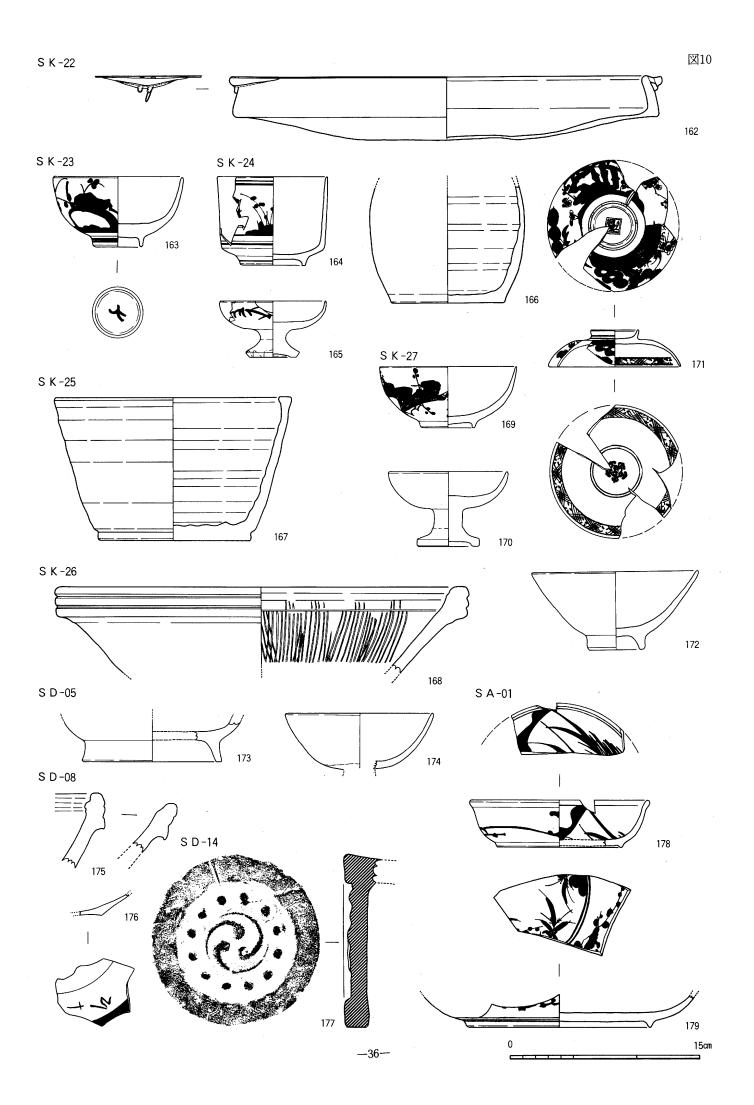
-32-

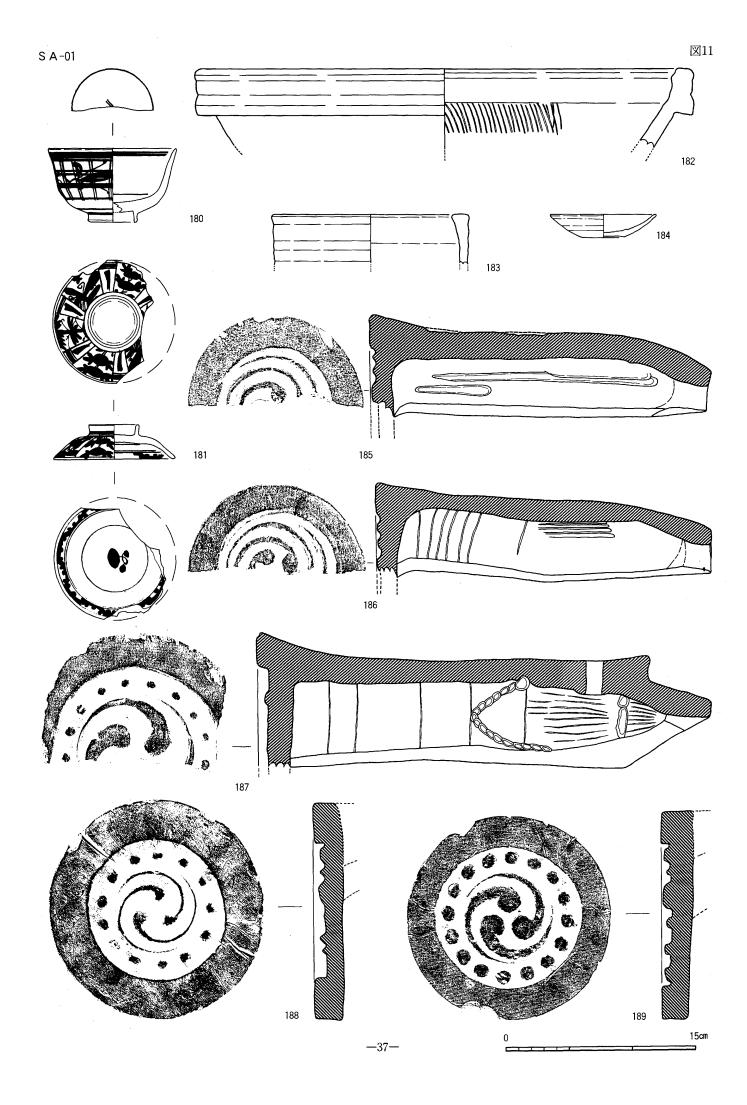
15cm



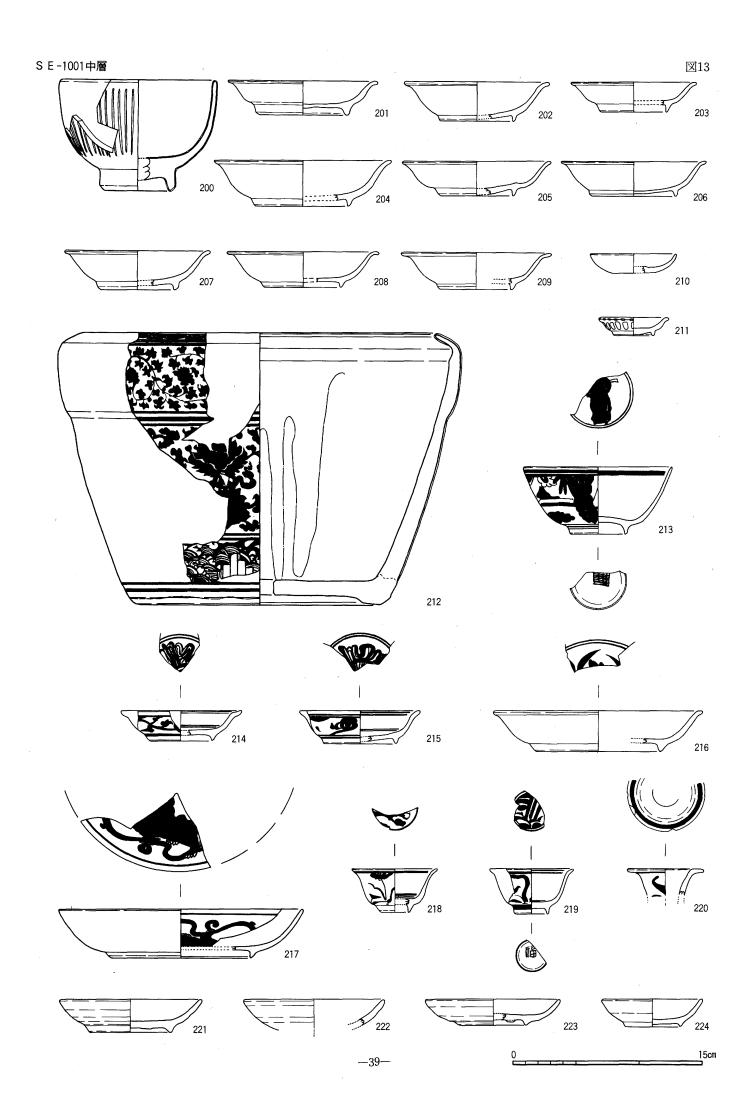


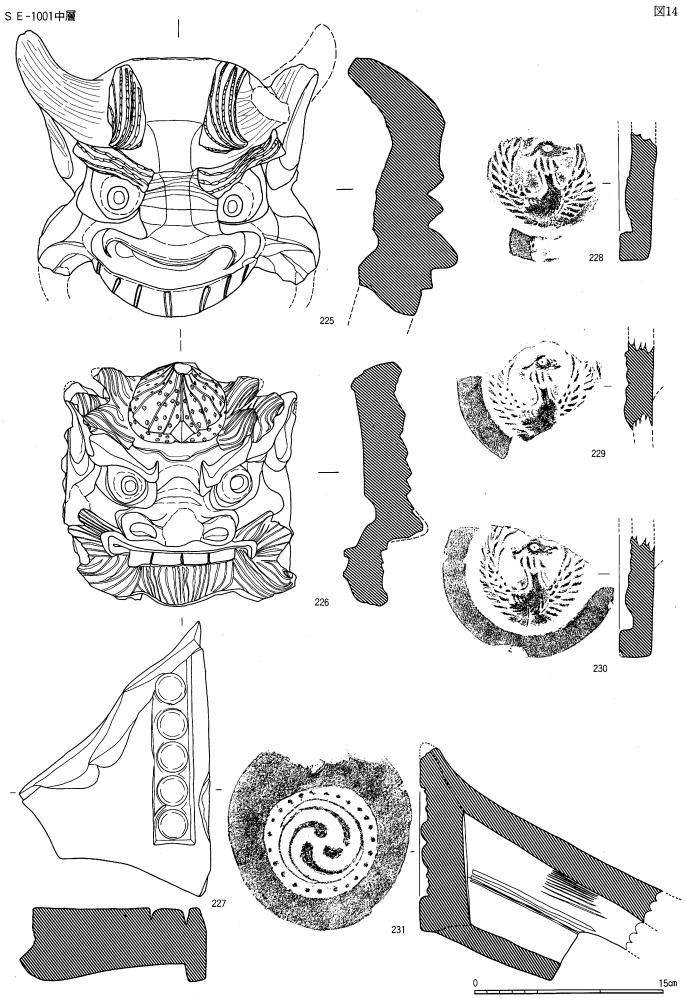




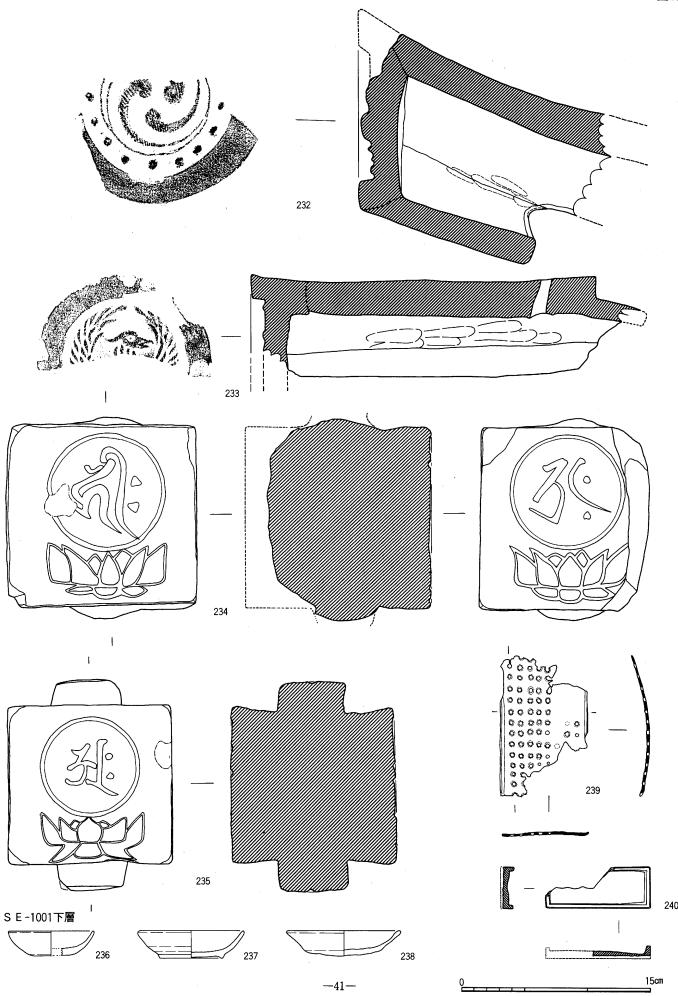


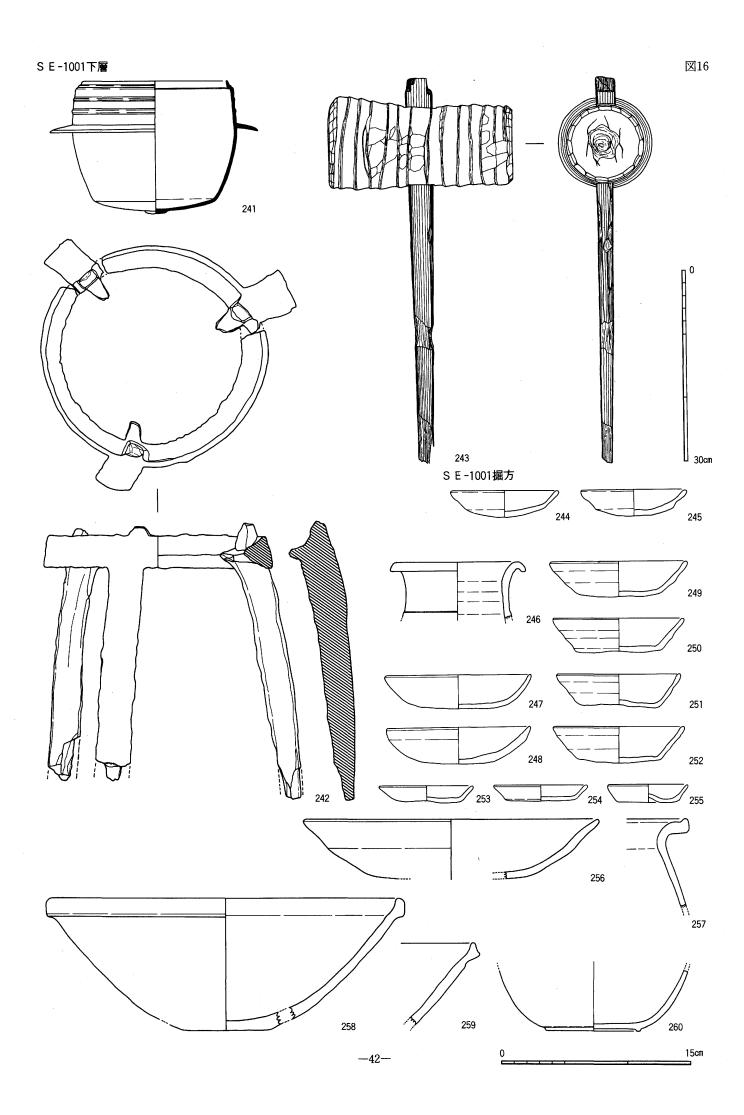
15cm

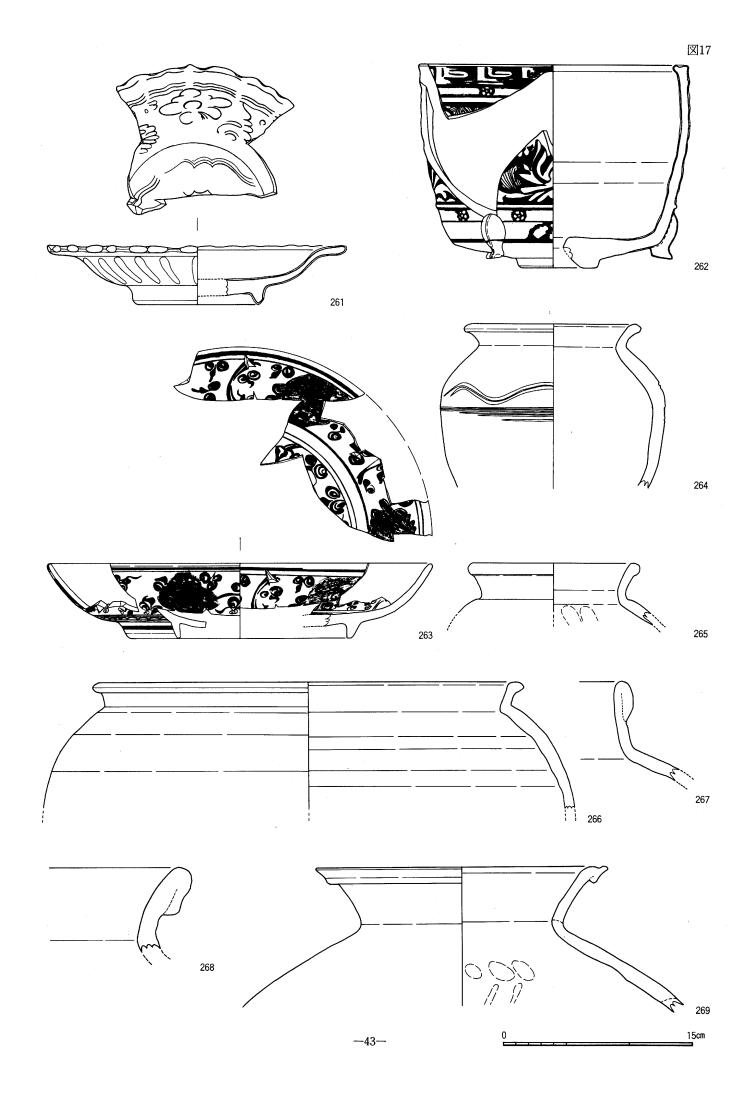




S E -1001中層 図15







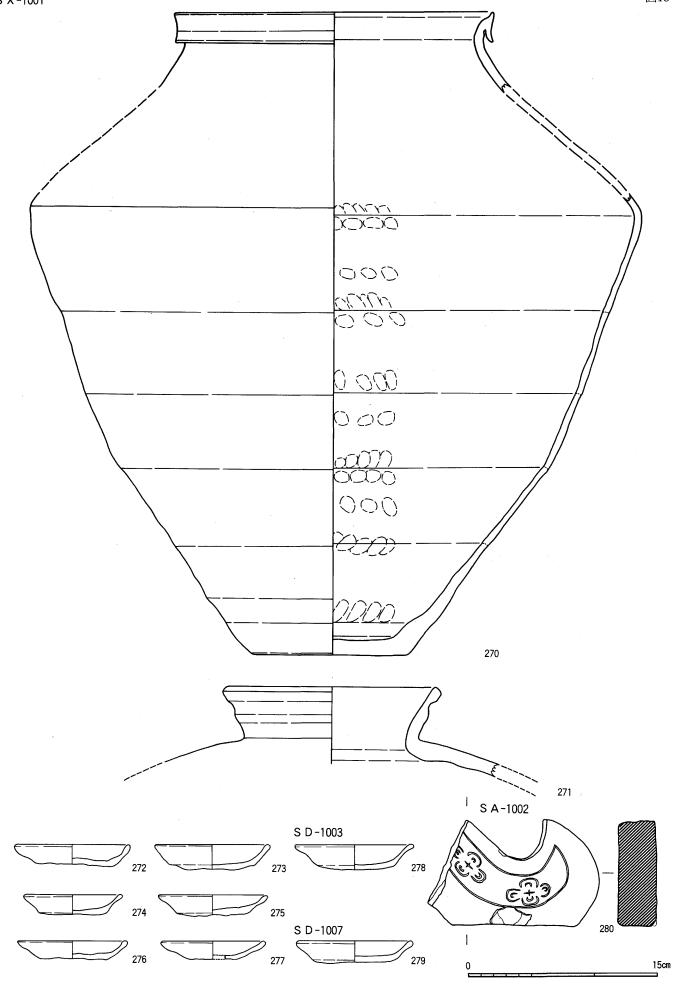
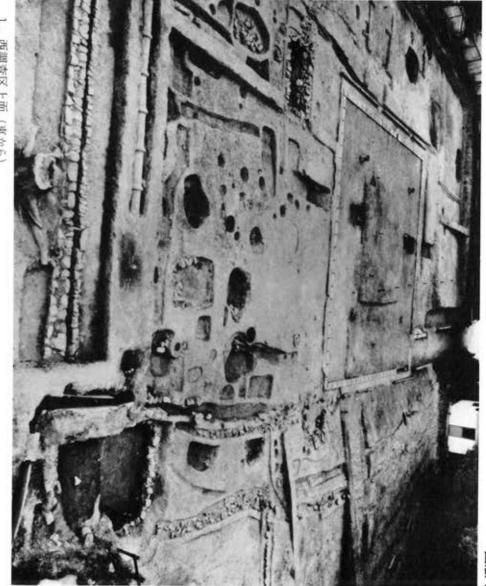
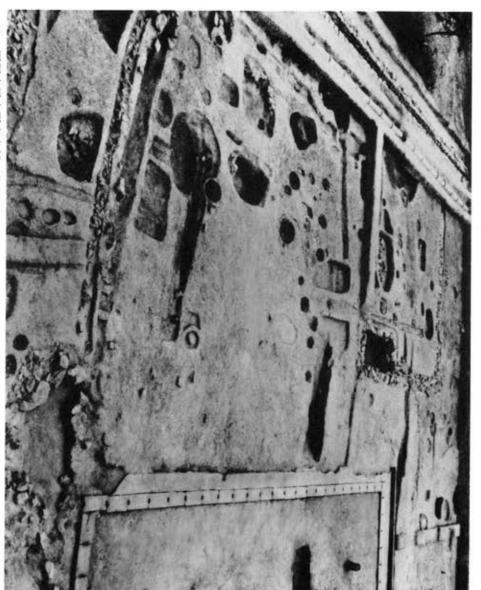


図 版



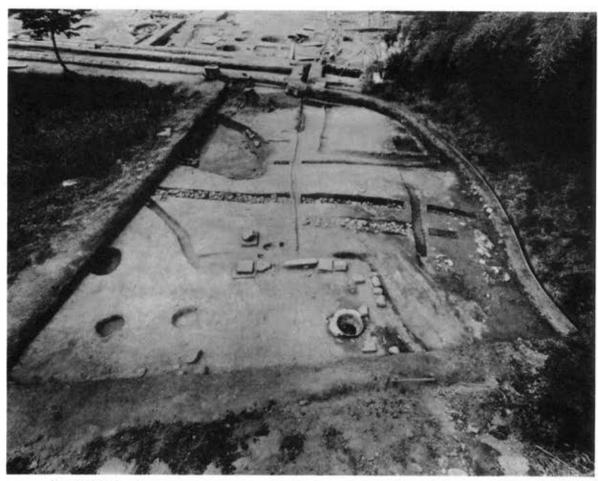
西調査区上面(東から



西調査区上面東半部 (北から)



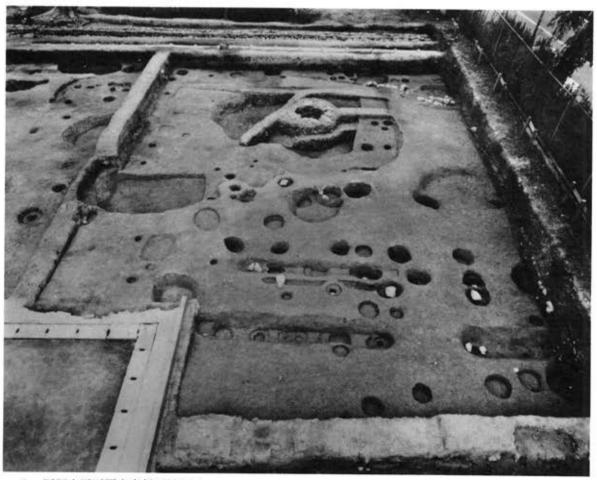
1. 東西調査区上面全景 (東から)



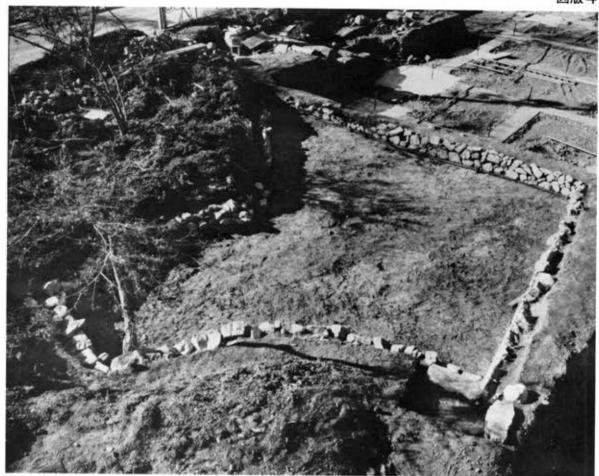
2. 東調査区全景(東から)



1. 西調査区下面南東部 (東から)



2. 西調査区下面南東部 (西から)

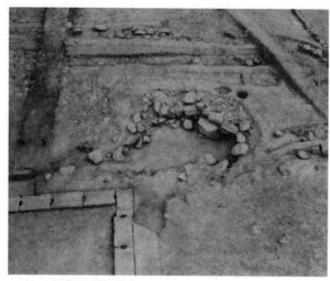


1. S G04 (東から)



2. S E1001 (東から)

図版5



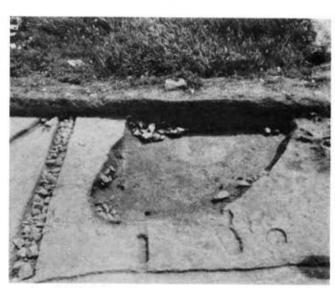
1. S G01 (南から)



2. S G02 (策から)



3. S G02 (北から)



4. S G03 (北から)



5. SG04東岸 (西から)



6. SG04北東隅 (南から)



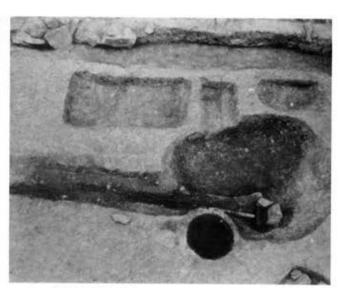
1. SF01 (北から)



2. SF01 (西から)



3. SF01 (西から)



4. S X01 (西から)



5. S X01 (西から)



6. S X01駒 (西から)

図版7



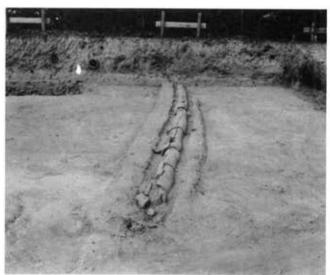
1. S X03 (東から)



2. S X 04 (西から)



3. S A01 (北から)



4. S D01 (東から)



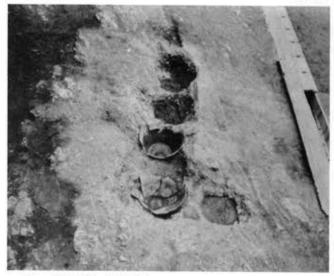
5. S E 1001 (東から)



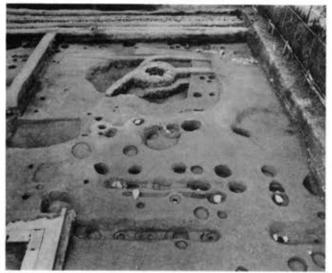
6. S E1001 (北から)



1. S X1001 (南から)



2. S X1001 (西から)



3. SB1001, SA1001・1002・1003 (西から)



4. 西調查区南西部土層



5. S K02石仏出土状況



6. S E1001鉄釜出土状況

図版9





















11 12













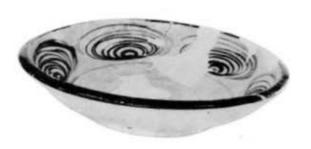




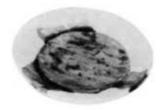


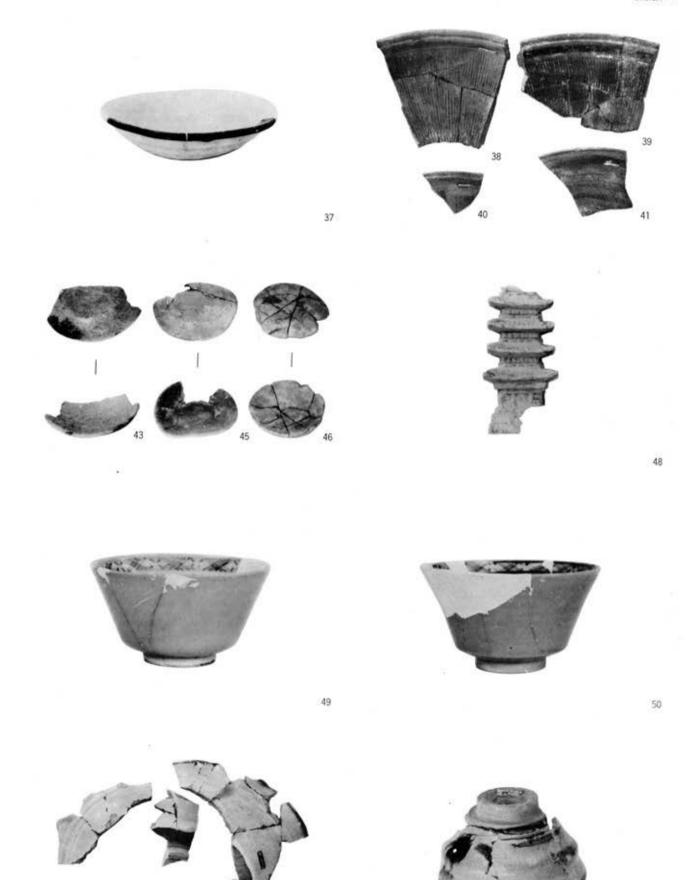




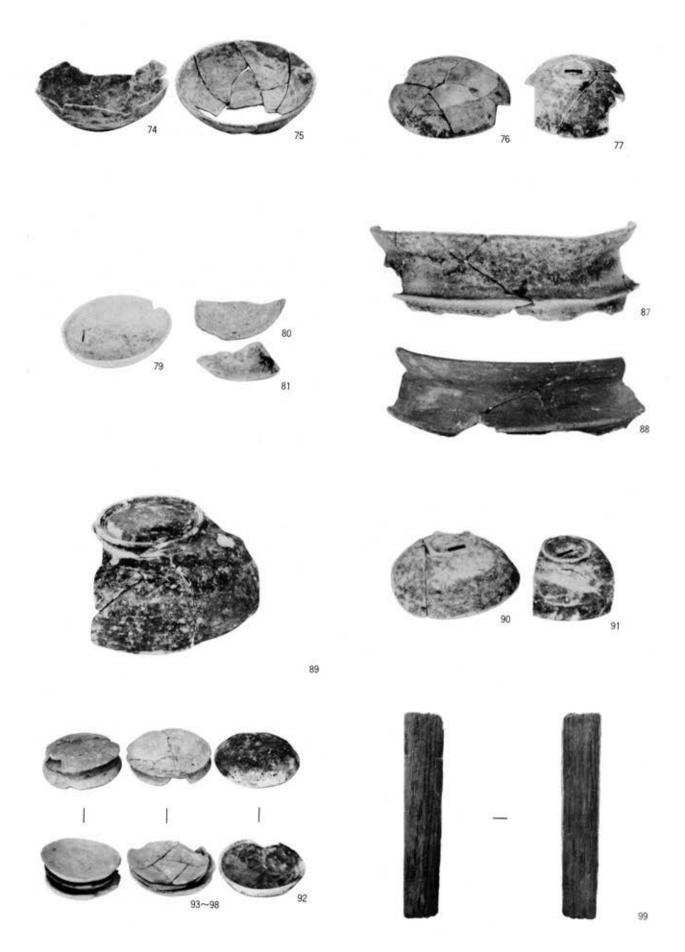


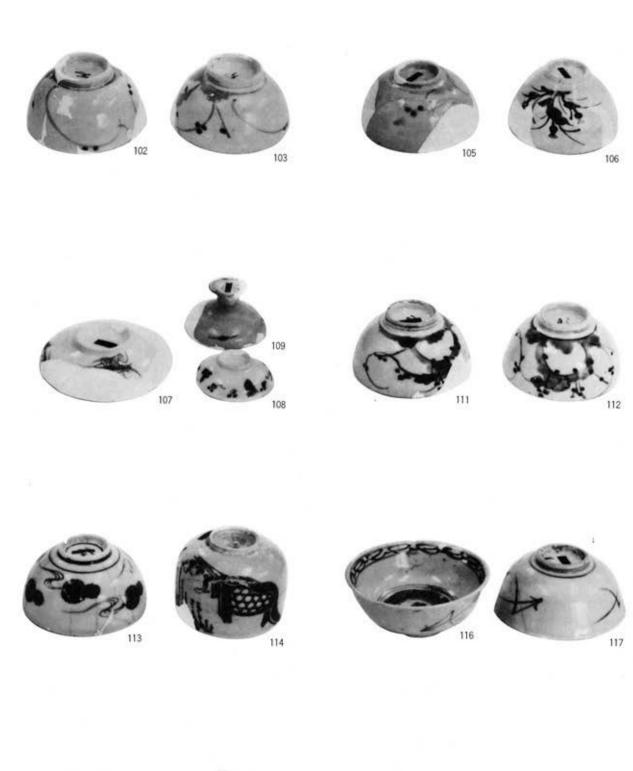










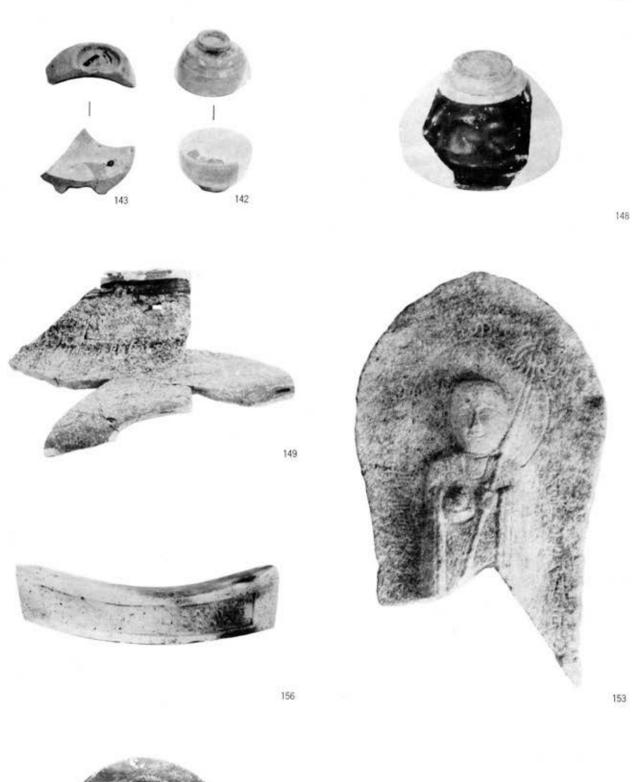








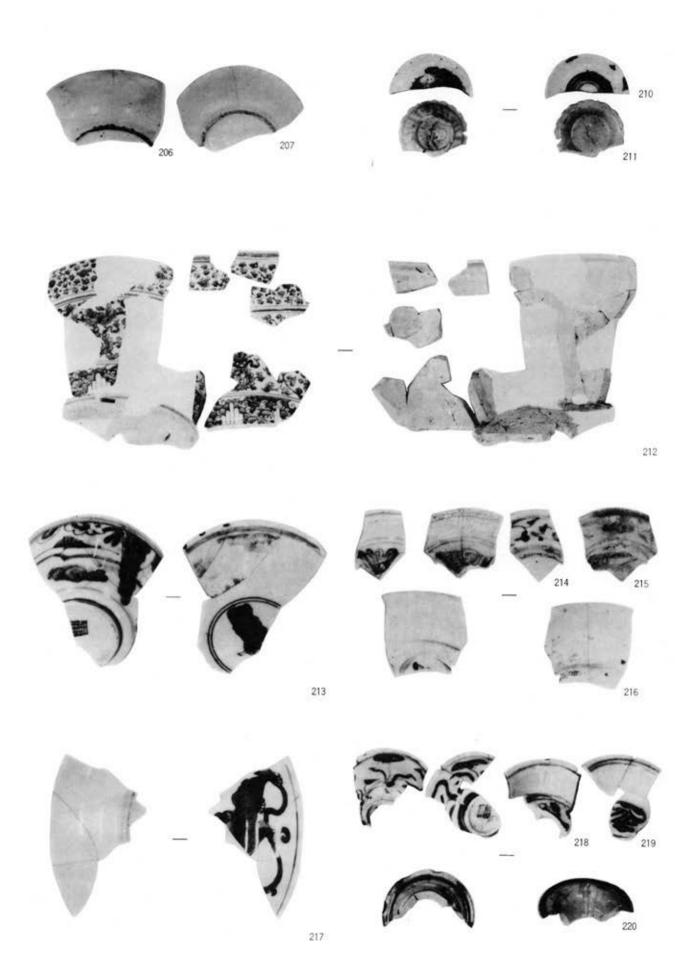




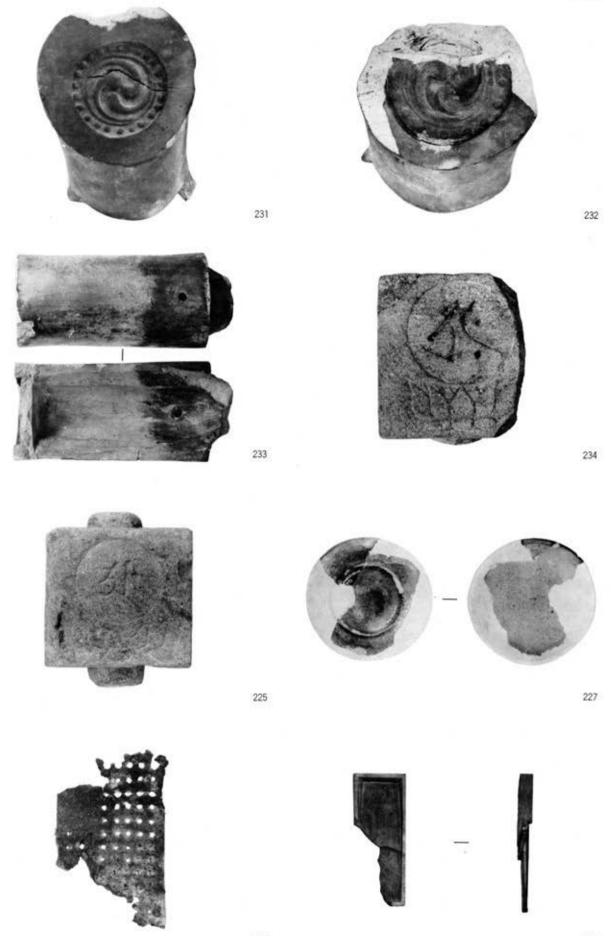




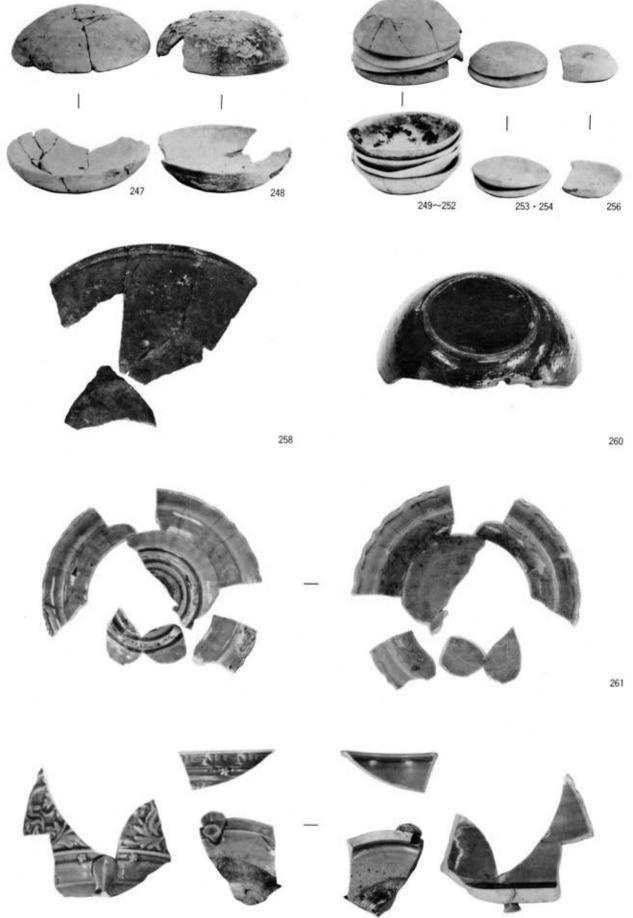














根来寺坊院跡

—岩出町立歴史民俗資料館 建設に伴なう発掘調査ー

編 集 ㈱和歌山県文化財センター

発行日 昭和63年3月26日

印刷真陽社